

大板井遺跡 25

—福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第279集

2014

小郡市教育委員会



序

福岡県筑後地方の北端に位置する小郡市は、これまでニュータウン開発や工業団地造成などに伴って、数多くの発掘調査を行ってきました。これらの調査によって発見された埋蔵文化財は10万点を超過しており、学史に名を残すものや国の重要文化財に指定された物件も見られます。

小郡市は「遺跡の宝庫」として全国的に知られるようになりましたが、多くの遺跡は発掘調査によって記録を保存できたのみで、その後開発によって消滅していきました。このようにして積み重ねてきた記録によって、小郡市各所の歴史的な様相や地域性、当時の社会像などが明らかにされ、現代に生きる私たちに郷土の歴史を伝えてくれています。

今回ここに報告いたします大板井遺跡は、昭和年間から継続的に発掘調査が行われ、弥生時代中期の集落が大々的に展開することで知られています。ここでも新たな資料を加える成果を得ることができました。

遺跡そのものはすでに開発工事によって消滅していますが、今後の文化財保護の向上と地域史研究にこの調査の成果が生かされることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたっては、関係各位と地元大板井区のみなさまに多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

平成26年3月31日
小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

例言

1. 本書は小郡市大板井に所在する埋蔵文化財包蔵地・大板井遺跡地内で計画された、コンビニエンスストア建設に先立って実施した発掘調査の報告書である。
2. 本報告書に掲載した遺構図面は調査担当者が作成した。
3. 発掘現場での個別遺構写真は調査担当者が撮影し、遺跡全景写真の撮影については有限会社空中写真企画に委託した。
4. 巻末写真図版の遺物写真の撮影は有限会社文化財写真工房に委託した。
5. 出土遺物の洗浄・復元には衛藤智嘉子・永倉さゆみの協力を得た。遺構図面の製図は上田が、土器実測は白木千里が、石器実測は西江幸子が、遺物実測図の製図は白木が行った。
6. 本調査に関わる出土遺物・写真・カラースライド等は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。

凡例

1. 本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に拠っている。
2. 本書で用いた標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。
3. 本書で用いている略号は以下のとおりである。
 竪穴住居：SC 土坑：SK 溝：SD ピット：SP

本文目次

I. 調査の経緯と経過	1
(1) 調査の経緯	
(2) 調査の組織	
(3) 調査の経過	
II. 位置と環境	2
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
III. 大板井遺跡 25 の遺構と遺物	5
IV. 調査成果のまとめ	24

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	3	第11図 4・8号住居 平・断面図 (S=1/60)	14
第2図 調査地位置図 (S=1/5,000)	3	第12図 4・8号住居 出土土器 (S=1/4)	15
第3図 大板井遺跡 25 遺構配置図 (S=1/100)	4	第13図 3・8号土坑 平・断面図 (S=1/40)	16
第4図 6号住居 平・断面図 (S=1/40)	5	第14図 3・8号土坑、1号溝 出土土器 (S=1/4)	17
第5図 6号住居 出土土器 (S=1/4)	6	第15図 1・5号住居 平・断面図 (S=1/40)	18
第6図 9・10号住居 平・断面図 (S=1/60)	7	第16図 7号住居 平・断面図 (S=1/60)	20
第7図 11・12号住居 平・断面図 (S=1/40)	8	第17図 1・5・7号住居 出土土器 (S=1/4)	21
第8図 9～12号住居 出土土器 (S=1/4)	10	第18図 出土石器 (1) (S=1/3)	21
第9図 1・2・5・6号土坑 平・断面図 (S=1/40)	11	第19図 出土石器・土製品 (2) (S=1/2)	22
第10図 1・2・5・6号土坑 出土土器 (S=1/4)	12	第20図 周辺調査地検出遺構 (S = 1/1,000)	24

図版目次

図版1 ①大板井遺跡 25 全景 (南から)	図版4 ①8号住居 全景 (南東から)
②大板井遺跡 25 全景 (直上から、写真左が北)	②8号住居 完掘状況 (南東から)
図版2 ①6号住居 完掘状況 (東から)	③3号土坑 完掘状況 (東から)
②9号住居 全景 (南から)	④1号住居 全景 (南から)
③9号住居 完掘状況 (南から)	⑤1号住居 完掘状況 (南から)
④10号住居 東西土層断面 (北東から)	⑥5号住居 南北土層断面 (西から)
⑤10号住居 完掘状況 (南東から)	⑦5号住居 東西土層断面 (北から)
⑥11号住居 南北土層断面 (東から)	⑧5号住居 カマド南北土層断面 (西から)
⑦11・12号住居 全景 (東から)	図版5 ①5号住居 カマド東西土層断面 (南から)
⑧1号土坑 完掘状況 (西から)	②5号住居 全景 (南から)
図版3 ①2号土坑 遺物出土状況 (1) (北から)	③5号住居 完掘状況 (南から)
②2号土坑 遺物出土状況 (2) (北から)	④7号住居 東西土層断面 (北から)
③2号土坑 完掘状況 (東から)	⑤7号住居 南北土層断面 (東から)
④5号土坑 完掘状況 (南から)	⑥7号住居 全景 (東から)
⑤6号土坑 完掘状況 (東から)	⑦7号住居 完掘状況 (東から)
⑥4号住居 南北土層断面 (東から)	⑧調査風景
⑦4号住居 完掘状況 (南東から)	図版6 出土遺物 (1)
⑧8号住居 東西土層断面 (南西から)	図版7 出土遺物 (2)

I. 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

小郡市大板井に所在する大板井遺跡は、市内の遺跡の中でも比較的早い時期に本格的な発掘調査が実施された遺跡である。平成25年度までに28次の調査が実施され、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。注目すべき時期は弥生時代中期から後期にかけての集落跡で、多くの竪穴住居や祭祀土坑が確認されており、当時の中核的な集落であったと考えられている。

本遺跡の調査は、店舗建設に先立って「埋蔵文化財の有無に関する照会」(事前審査番号11159)が提出されたことに始まる。これを受けて試掘調査を実施した結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、建物部分については発掘調査による記録保存が必要な旨の回答を行った。その後、施工業者と小郡市教育委員会で協議し、平成24年度事業として発掘調査を実施し、翌年度に調査報告書を刊行することで同意を得た。

(2) 調査の組織

調査に関わった組織と担当者は下記のとおりである。

<小郡市教育委員会>

教育長 清武 輝

部長 吉浦大志博 (H25.3.31)

佐藤秀行 (H25.4.1 ~)

文化財課長 片岡宏二

係長 柏原孝俊

技師 上田 恵・龍 孝明

<調査参加者> 荒巻国利 石井京子 草場誠子 佐藤照子 朱雀聡一郎 土井久江

(以上小郡市在住、五十音順)

(3) 調査の経過

発掘調査は平成24年5月7日から6月21日にかけて実施した。調査区はいずれも現況G.L.から60～80cmの位置まで近年の耕作土を重機で掘り下げ、その後人力で遺構の検出・掘削を行った。

以下に調査日誌より調査の経過の概略を記す。

平成24年5月7日 調査区表土の重機掘削開始。

5月10日 機材搬入。

5月11日 測量作業実施。人力による遺構検出・掘削開始。住居、溝、土坑、ピット群を検出。随時遺構の掘削、記録図化、写真撮影を実施。遺構の主体は弥生・古墳時代。

6月19日 全ての遺構の掘削、記録図化を完了。

6月20日 バルーンを使用した遺跡全景写真撮影を実施。

6月21日 工事作業のため埋戻しは行わず引き渡しを実施。

以後、図面・出土遺物の整理作業を実施。

II. 位置と環境

(1) 地理的環境

宝満山を水源とする宝満川によって小郡市は東西に二分される。その西岸は脊振山系から派生する丘陵地（通称・三国丘陵）を頂部として低位段丘が南へ向かって伸び、沖積地を経て筑後平野へと連なる。大板井遺跡はこの三国丘陵から緩やかにつながる低台地上に位置している。遺跡は幅の広い舌状の台地に展開しており、その範囲は南北約 1.3km、東西約 5.5kmにも及ぶ。本書で報告する調査区は舌状台地の南半部に位置し、西の縁辺部に該当する。

(2) 歴史的環境

大板井遺跡は、大正年間に九州帝国大学（当時）の中山平次郎博士によって『筑後國三井郡小郡村大字大板井の巨石』という名称で紹介された、学史的に著名な遺跡である。昭和年間から小規模ではあるが継続的に調査が行われており、多くの資料が蓄積されてきている。以下、周辺地域に分布する遺跡を中心に歴史的環境の概要を示す。

小郡市内における旧石器・縄文時代の遺構・遺物の確認例は非常に少ない。花立山周辺で採集された石器類、三国丘陵上の発掘調査で確認された石器類のほか、干潟向畔ヶ浦遺跡（1）の落とし穴状遺構、大崎井牟田遺跡（2）で検出された集石遺構など、これまでの調査事例数と比較するとごくわずかである。大板井遺跡では6次調査でナイフ型石器や台石が、12次調査で混入品である縄文土器が確認されている。

弥生時代になると小郡市内で本格的な集落経営が始まる。三国丘陵を中心に展開した小郡の弥生文化は、中期に大板井遺跡へ拠点を移す。この時期が大板井遺跡の最盛期であり、西に隣接する小郡遺跡（3）・小郡若山遺跡（4）とともに当時の中枢的な集落を構成していたと考えられる。大板井遺跡として周辺の埋蔵文化財包蔵地に括られている範囲では、各所でこの時期の住居や墓域、祭祀土坑など多様な遺構とこれに伴う遺物が見つかる。前述の巨石は現在「石崎さん」（5）という名で呼ばれ、地域の人々に神聖視されてきたという伝承が残っている。ここは1992年に九州大学と小郡市教育委員会によって発掘調査が行われ、巨石の下部に甕棺墓があることを確認している。また、1935年には大板井遺跡の南端を東西に横断する甘木鉄道軌道敷きの土取りに際して、弥生時代の祭器である銅戈7本が出土したとの記録が見られる。小郡遺跡では同時期の大型円形住居が、小郡若山遺跡では多鈕細文鏡2面を甕型土器とともに埋納したピットが見つかり、当時のこの地域の権勢をうかがわせる。

古墳時代になると集落は一旦断絶するが、律令期には小郡遺跡の所在地に筑後国御原郡の郡役所に比定されている国指定史跡小郡官衙遺跡（小郡官衙遺跡群 小郡官衙遺跡 上岩田遺跡）が成立し、新たな展開を見せる。現在の「大板井」の地名は平安時代の文献である『和名抄』に記された、御原郡4郷のひとつ、「板井」に由来すると推測されている。大板井遺跡でも官衙の正倉群や関連施設と推定される版築状盛土による造成跡などが見つかり、この時期に官衙近接地として再び隆盛を迎えたと思われる。

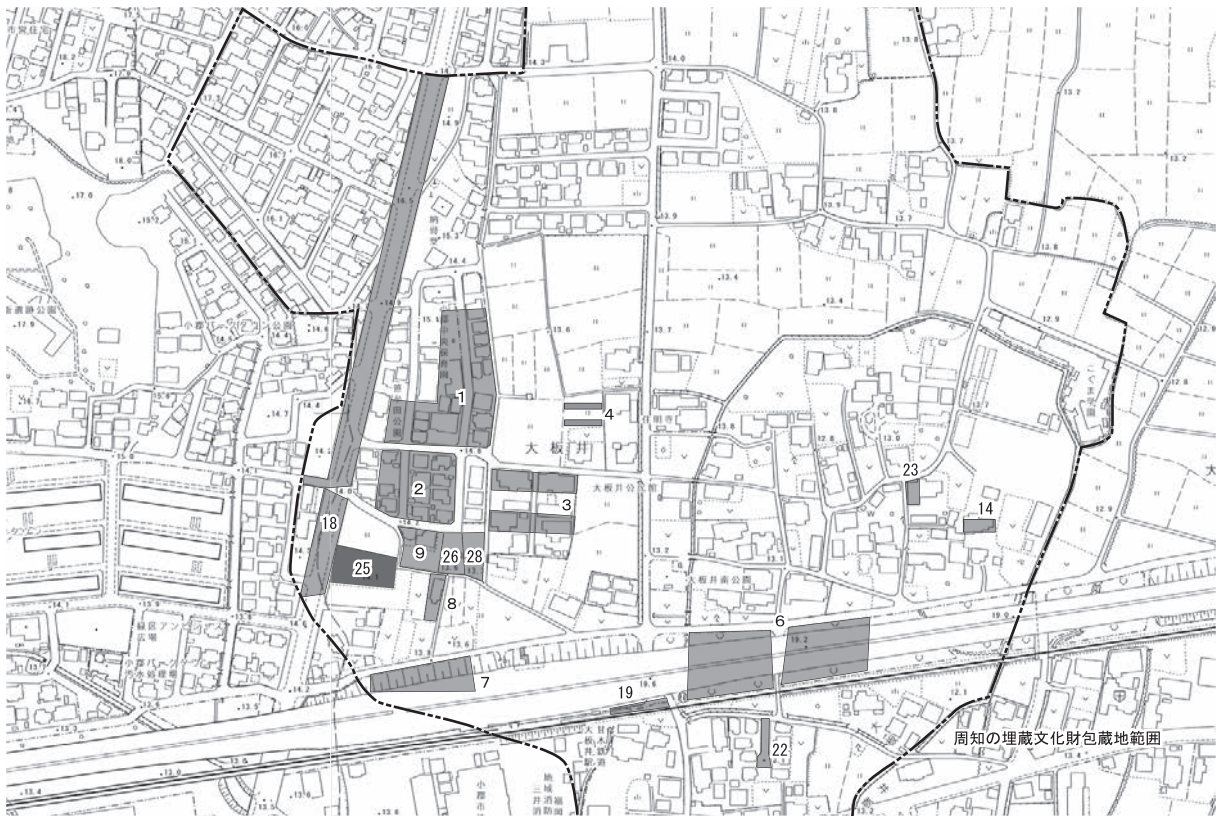
中世以降も集落経営は続き、遺跡の規模からすると散発的ではあるが、土壇墓・井戸などが確認されている。近年の発掘調査では近世の資料も散見されることから、この傾向は近代にいたるまで継続し、現在の大板井集落へとつながると考えられる。

このように本遺跡の周辺では、長年に渡る人々の生活が連綿と続けられてきた。

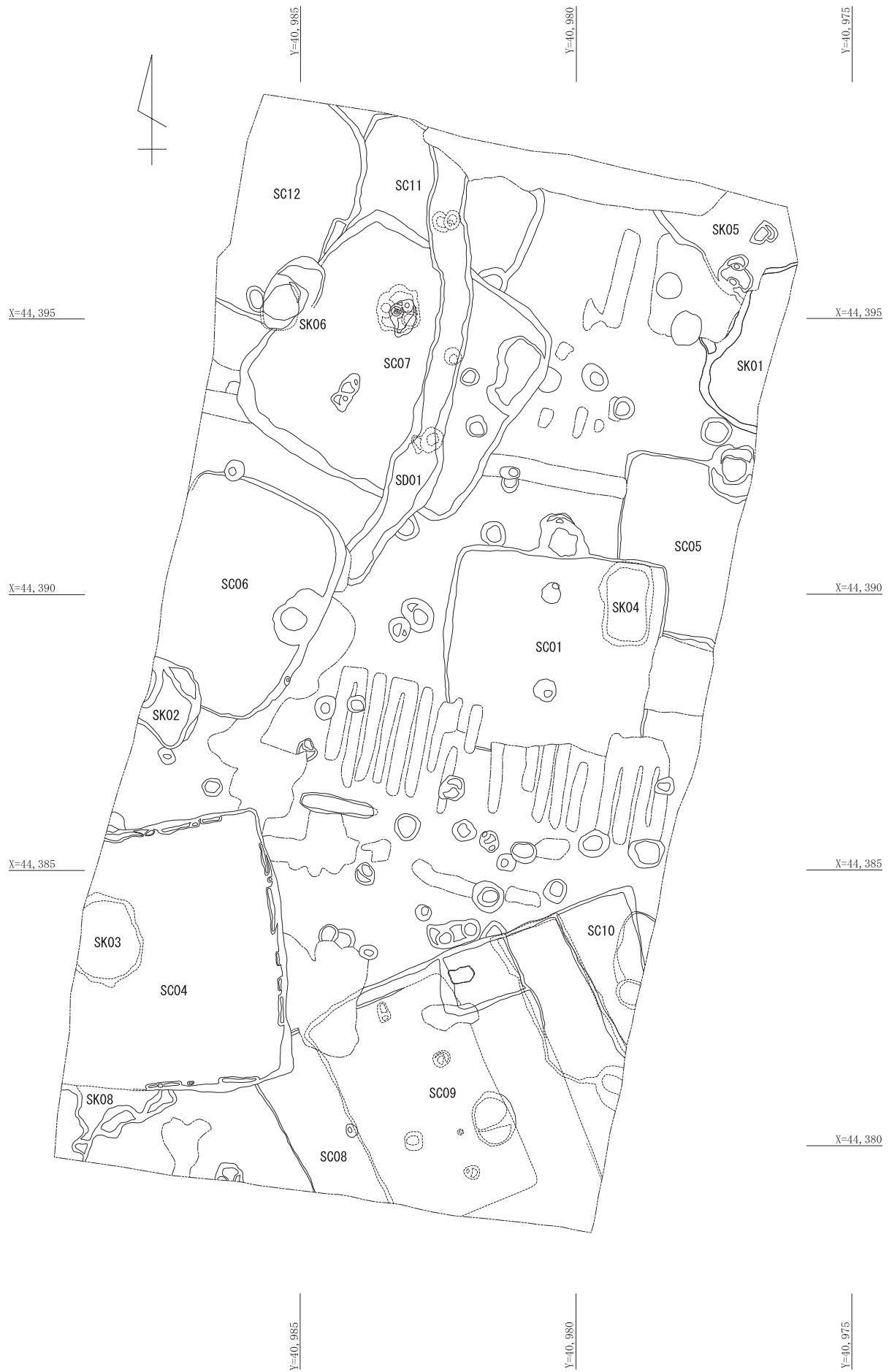


1. 干潟向畦ヶ浦 2. 大崎井牟田 3. 小郡(小郡官衙) 4. 小郡若山 5. 石崎さん(大板井11) 6. 大板井25
7. 上岩田 8. 井上魔寺

第1図 周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)



第2図 調査地位置図 (S = 1/5,000)



第 3 図 大板井遺跡 25 遺構配置図 (S=1/100)

Ⅲ. 大板井遺跡 25 の遺構と遺物

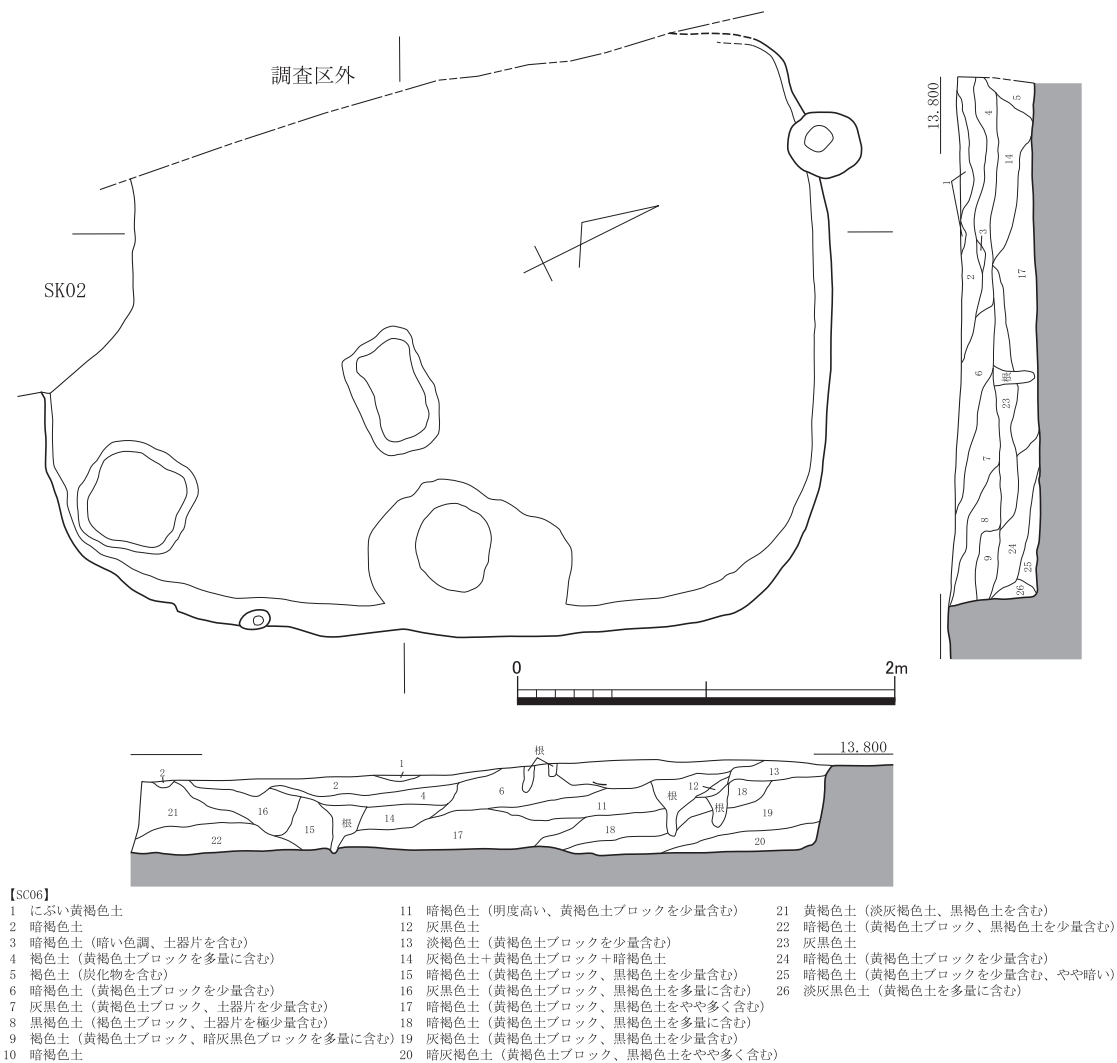
調査区は、大板井遺跡の既調査地が密集する地域にあたり、弥生時代中期の集落の一部を構成すると思われる箇所である。西には小郡遺跡（小郡官衙遺跡）を臨み、古代の版築状盛土による造成を確認した調査区（XⅧ区）の東隣に当たる。遺構の掘り込み面は褐色ローム（基盤層）で、標高 13.5m 前後を測る。上部はかつて畑地として使用されていた際に削平を受けており、遺構の上部は攪乱によって損なわれていた。隣接する調査地と比較すると遺構密度は低く、出土遺物も少量にとどまっている。

調査区からは、竪穴住居 10 軒、土坑 7 基、溝状遺構 1 条とピット群を検出している。遺構検出・掘削時に先後関係を誤ったものがあるため、2・3号住居、7号土坑は欠番としている。また、遺構測量時に不備があったため、一部箇所については点線で復元を行っている。記して陳謝する。

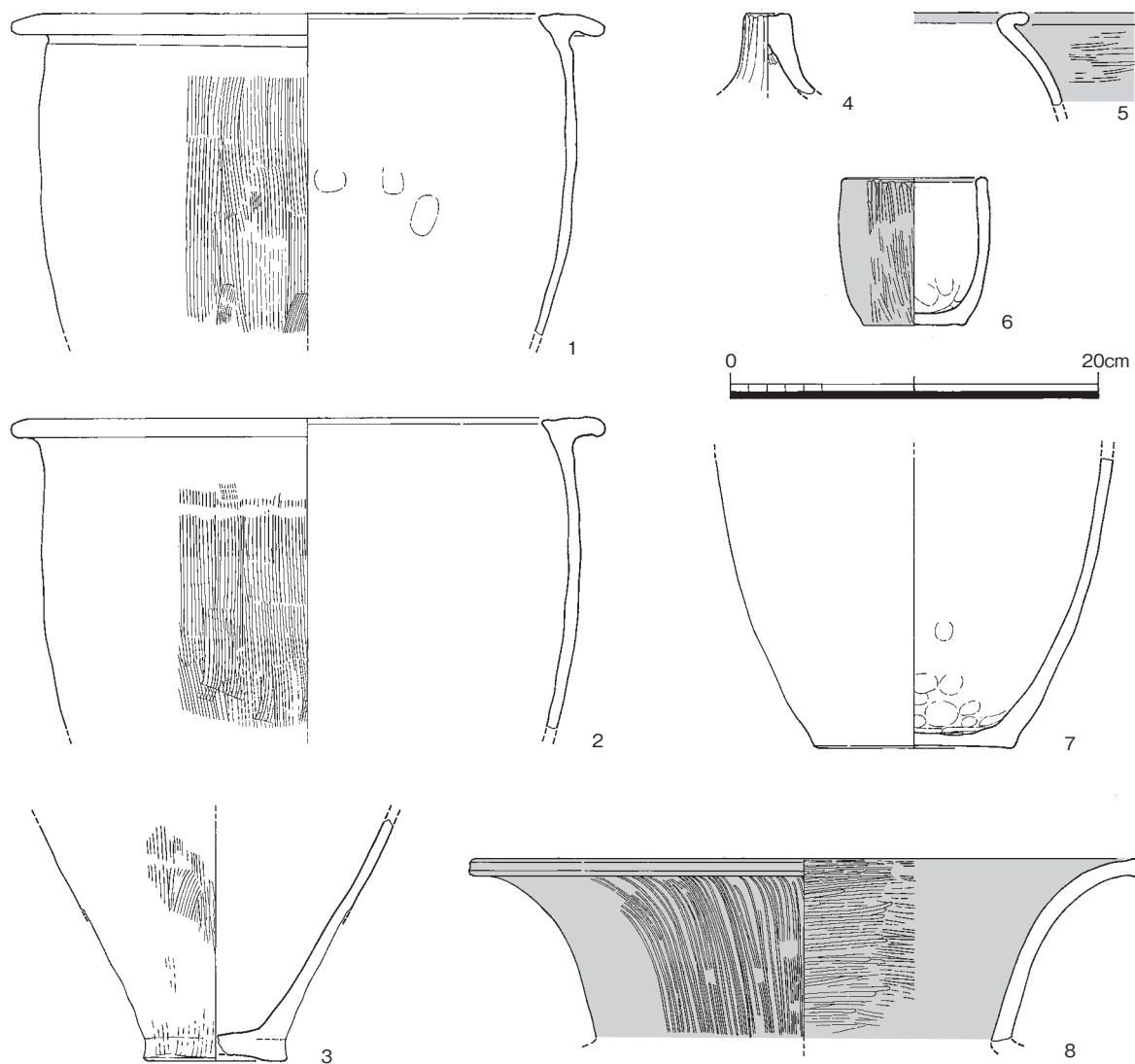
【弥生時代の遺構・遺物】

6号住居（第4図・図版2）

調査区中央西端に位置し、南西隅は調査区外に所在する。調査区壁面の土層観察から、2号土坑に切られることを確認している。また、1号溝にも切られているが、検出段階で先後関係を誤り、この住居を先行して掘削している。



第4図 6号住居 平・断面図（S=1/40）



第5図 6号住居 出土土器 (S=1/4)

主軸はやや東に振った南北方向で、11・12号住居と一致する。平面プランは隅丸長方形を呈する。長さ4.1m、幅3.1m、深さ最大0.5mを測る。遺構底面には貼床状の黄褐色粘質土の堆積が薄く認められた。柱穴は検出されず、遺構の立ち上がり周辺に溝状の痕跡も認められない。東辺中央に炉跡状の浅い掘り込みがあるが、周辺に焼土の堆積や被熱痕跡は見られなかった。

出土遺物 (第5図・図版6)

少量の弥生土器が出土しているが、いずれも破片資料である。1～3は中型の甕。口縁端部は2のように水平を維持するものと、1のように下垂するものが混在する。4はミニチュアの器台。内外面とも工具ナデで仕上げる。5は無頸壺の口縁部。残存部に穿孔は認められない。6は体部が直立するタイプの鉢。内面の丹塗りは意識的に行われている。外面は丁寧なタテミガキ。7は鉢の胴部。内面は指で、外面は工具で丁寧なナデ調整を行っている。8は壺の頸部。内外面とも丁寧なミガキを施す。口縁端部はM字に近い段差を持つ。

9号住居 (第6図・図版2)

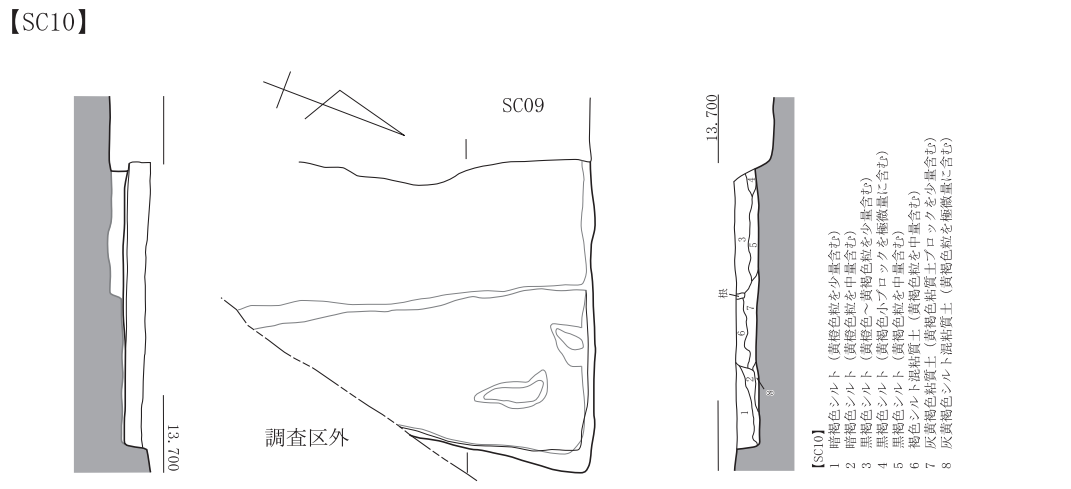
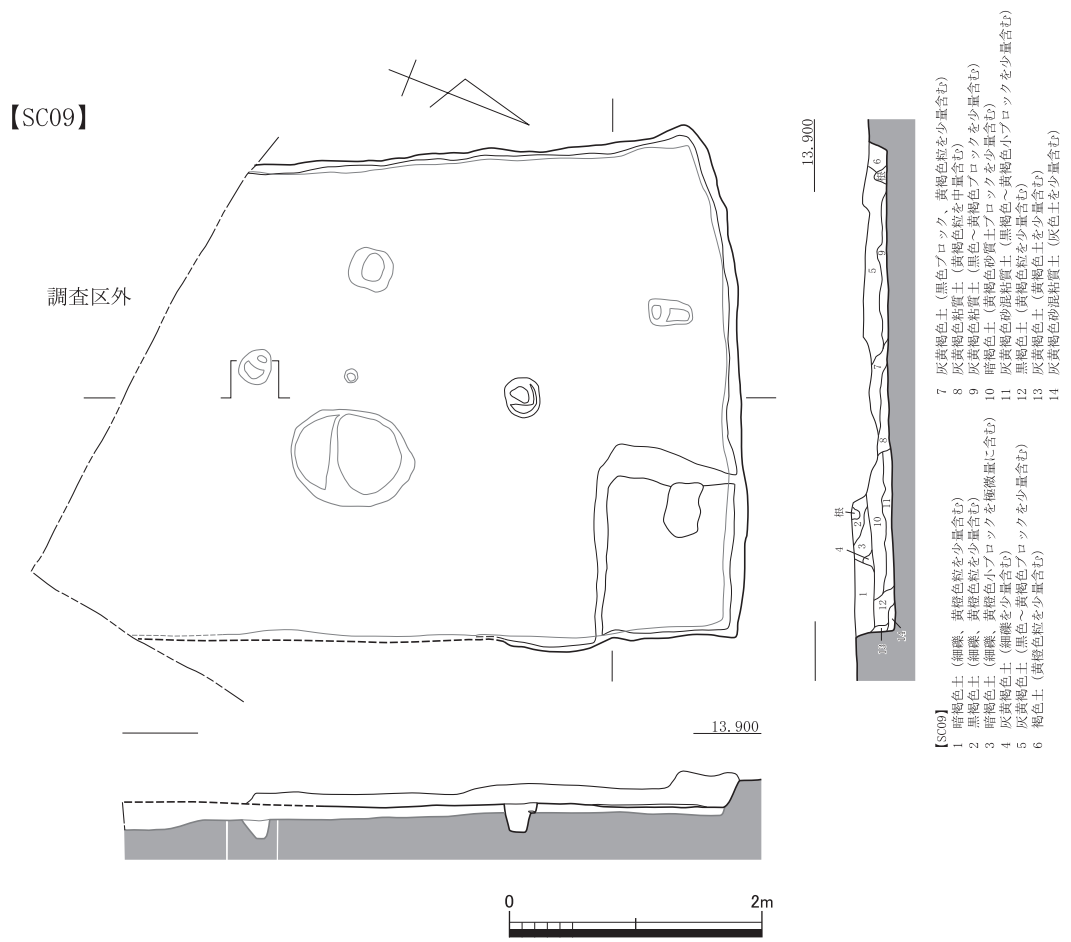
調査区南東隅に位置し、南辺は調査区外に所在する。8～10号住居については、検出時に明確な切

り合い関係を把握することができず、一部をトレンチ状に掘削して確認を行ったため、遺構の掘り込み部分が記録できていない。

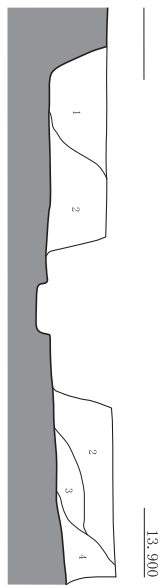
主軸は北東—南西方向で、8・10号住居と一致する。平面プランは長方形を呈する。残存長5.6m、幅4.0m、深さは30cm以上となる。遺構底面には貼床状の黄褐色粘質土が見られたが、その下層掘り込みもほぼ平坦な形状を取る。西隅にベッド状の盛土を施しており、硬く叩き締めている。柱穴は主軸に沿って2穴確認しており、いずれも径25cm、深さ30cm前後であった。柱穴の並びからややずれた位置に、炉跡状の楕円形掘り込みが見られるが、周辺に焼土・炭化物等は認められない。

出土遺物 (第8・18図・図版6・7)

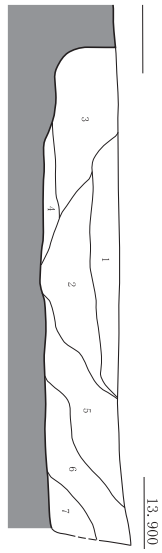
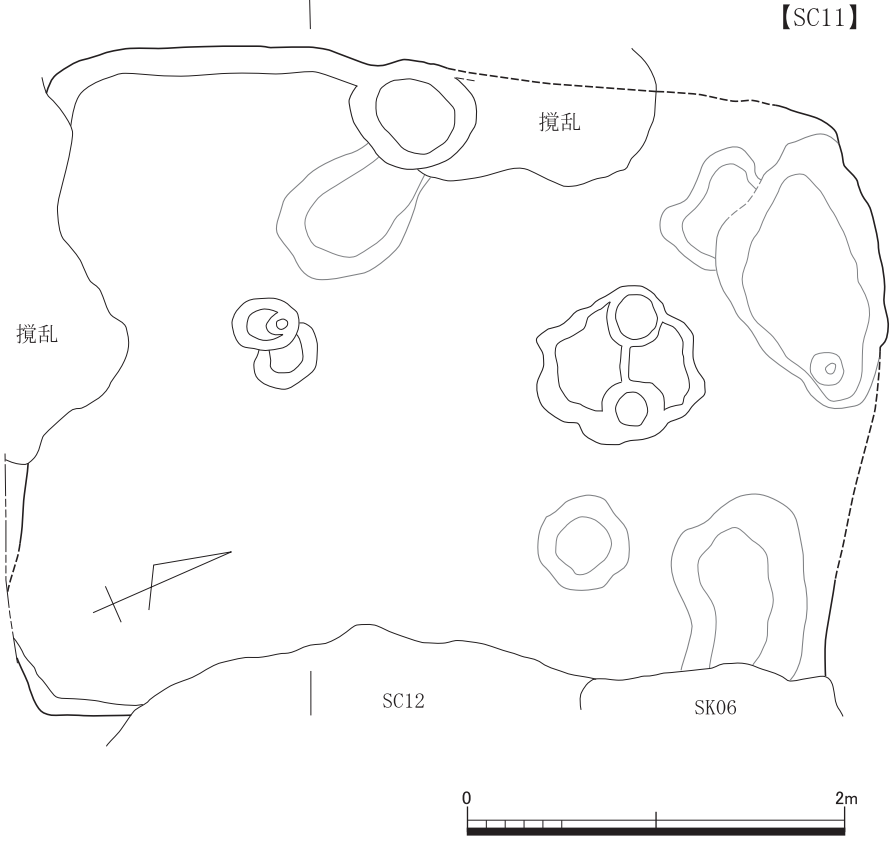
出土遺物は小片がほとんどである。7は後期の壺口縁部。頸部は外側へ湾曲し、端部はくの字形に



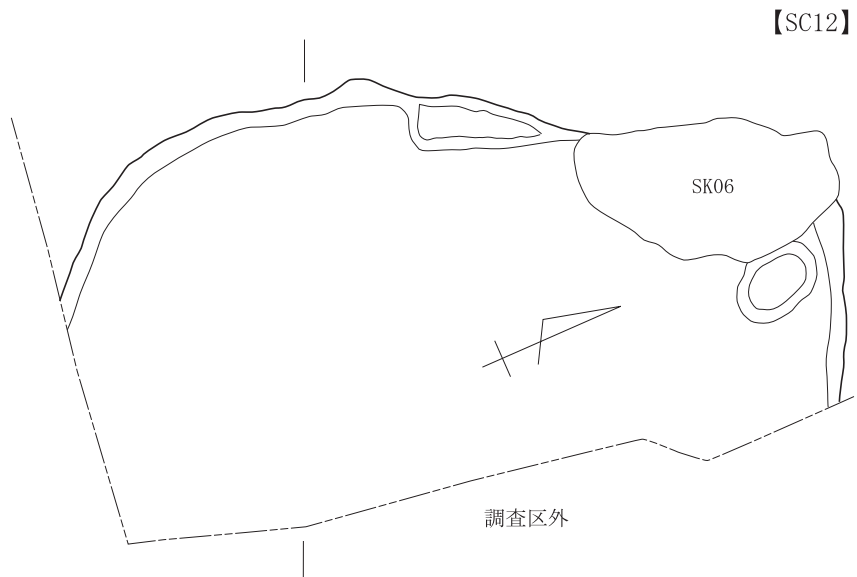
第6図 9・10号住居 平・断面図 (S=1/60)



- 【SC11】
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土+暗黄褐色土
 - 3 暗褐色土(黄褐色土ヲロツクをやや多く含む)
 - 4 灰黒色土



- 【SC12】
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土(黄褐色土ヲロツクをやや多く含む)
 - 3 暗褐色土(黄褐色土ヲロツクをわずかに含む)
 - 4 灰黒色土(黄褐色土ヲロツクを多く含む)
 - 5 暗褐色土(黄褐色土ヲロツクを少し含む)
 - 6 灰黒色土(暗褐色土ヲロツクをやや多く含む)
 - 7 灰黒色土(黄褐色土ヲロツクを少し含む)



第7図 11・12号住居 平・断面図 (S=1/40)

立ち上がって平坦面を持つ。屈曲部に刻みを施す。8は壺の底部。内面は工具ナデ、外面はミガキ調整だが全体に磨滅が著しい。2は敲石を転用した砥石。片面に敲打痕が残る。

10号住居（第6図・図版2）

調査区南東隅に位置し、東・南辺は調査区外に所在する。西側の大半は9号住居に切られ、残存していない。主軸は北東—南西方向で、8・9号住居と一致する。平面プランは方形もしくは長方形を呈すると思われる。残存幅4.2m、深さは20cm以上となる。遺構の底面には黄褐色粘質土の貼床が部分的に認められる。遺構本来の掘り込みは北東辺に沿ってベッド状の段差を持ち、これを貼床で均している。調査終了後、切り合い関係のある遺構と併せて柱穴の検討を行ったが、この遺構に伴うものは確認できなかった。残存状況が不良のため、付随する掘り込み等も不明である。

出土遺物（第8図・図版6）

図示が可能な遺物は1点のみであった。9は甕で、全体に厚いつくり。口縁部は頸部で屈曲して直線的に立ち上がる。口縁端部は平坦面を持つ。内面は幅の広いハケ、外面はタタキののち不定方向のハケを施し、底部はごく粗いナデ調整。

11号住居（第7図・図版2）

調査区北辺西寄りに位置し、7・12号住居、6号土坑、1号溝、攪乱に切られる。上部の削平は少ないが、掘り込みラインの残存状況は非常に悪い。

主軸はやや東に振った南北方向で、6・12号住居と一致する。平面プランは隅丸長方形を呈する。長さ4.6m、幅3.6m、深さは30cm以上となる。遺構底面には薄く貼床状の黄褐色粘質土が見られ、その下層に楕円形・不整円形の掘り込みが複数認められた。柱穴は主軸に沿って2穴確認している。いずれも径35cm前後、深さ40cm前後の楕円形である。西辺の中央部分に楕円形の掘り込みが見られるが、用途は不明である。

出土遺物（第8・19図・図版6・7）

出土遺物は極めて少量であった。1は鉢の底部で、外面は磨滅が著しい。内面には指オサエとナデ調整。その他、頁岩質砂岩の石庖丁片3点と土製投弾が出土している。

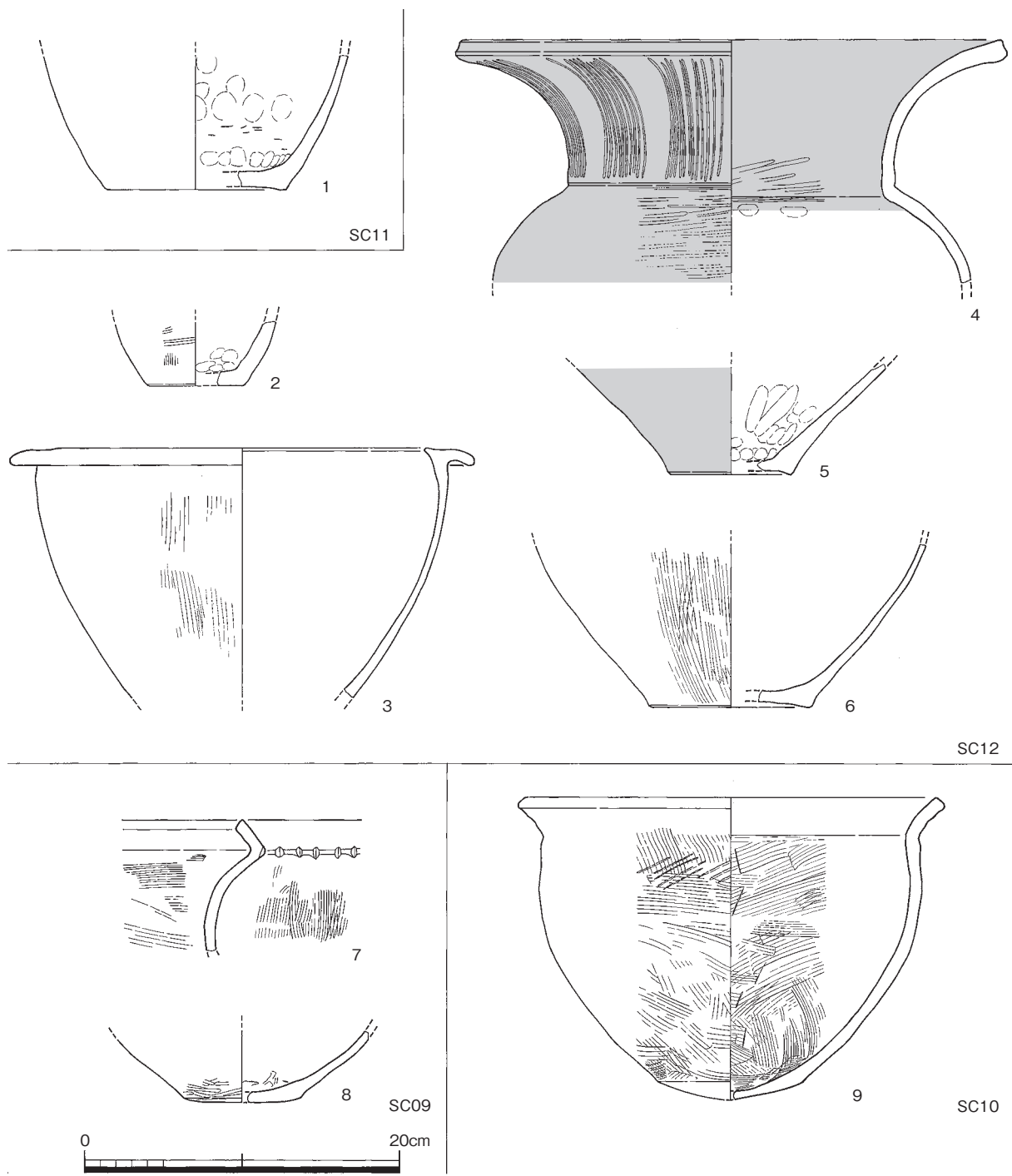
12号住居（第7図・図版2）

調査区北西隅に位置し、遺構の西半部は調査区外に所在する。7号住居、6号土坑に切られ、11号住居を切る。遺構底面には黄褐色粘質土の貼床が見られたが、調査期間の都合で貼床下層の掘り込みは確認できていない。

主軸はやや東に振った南北方向で、6・11号住居と一致する。平面プランは隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すると思われる。長さ4.1m、残存幅2.25m、深さは0.45m以上となる。東辺の中央部に小型のテラスを持つ他は、付随する掘り込み等は認められない。柱穴も未検出である。

出土遺物（第8・19図・図版6・7）

埋土から遺物が出土しているが、小片が多い。3・6は甕。口縁端部が垂下する新しいもの。いずれも内外面に炭化物の付着が目立つ。4・5は丹塗りの壺。口縁～肩部のものは埋土内に直立して出土している。2は小型の鉢。その他、赤紫色泥岩の石庖丁と土製円盤が出土している。



第8図 9～12号住居 出土土器 (S=1/4)

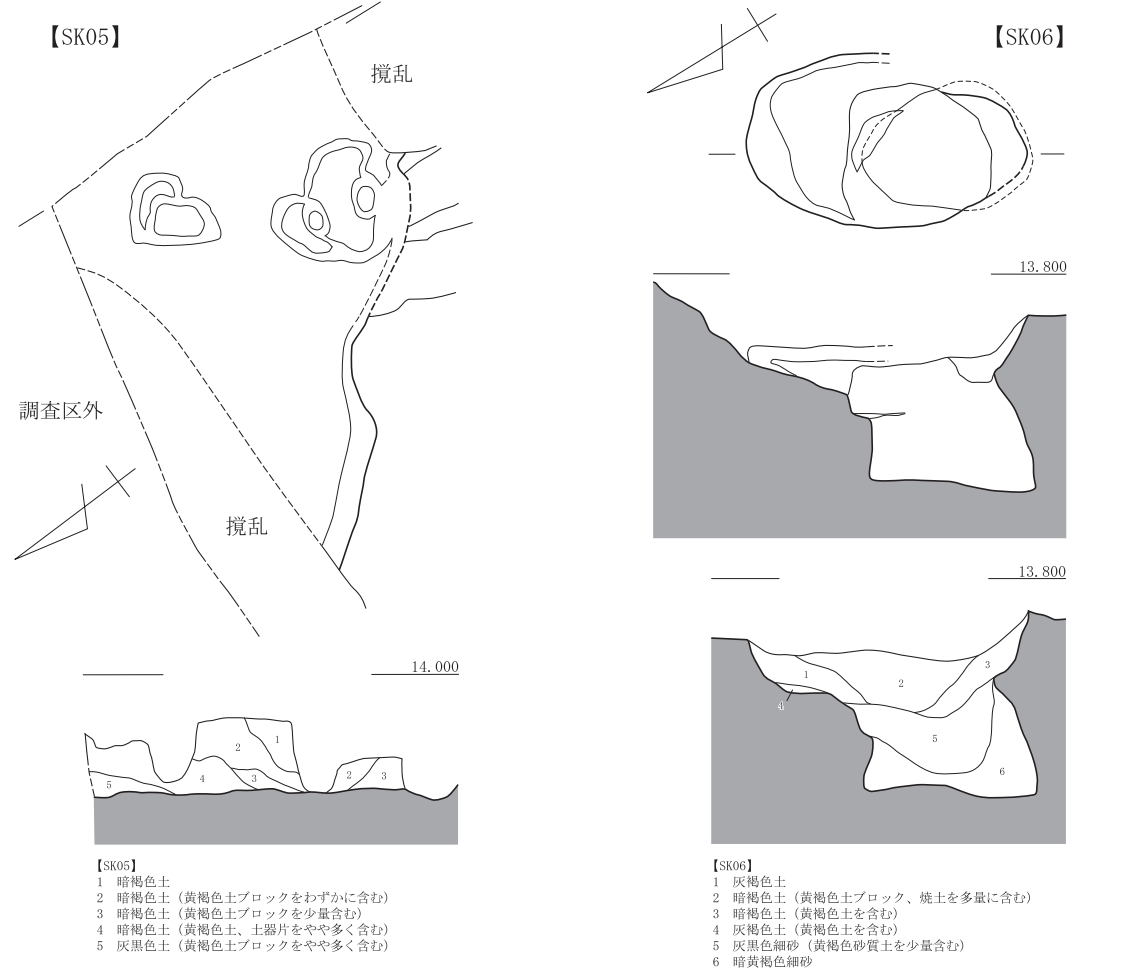
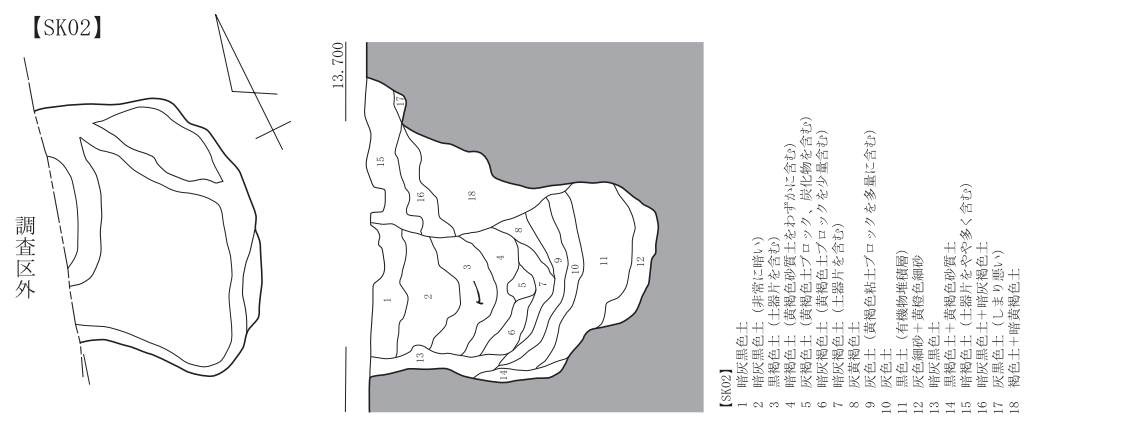
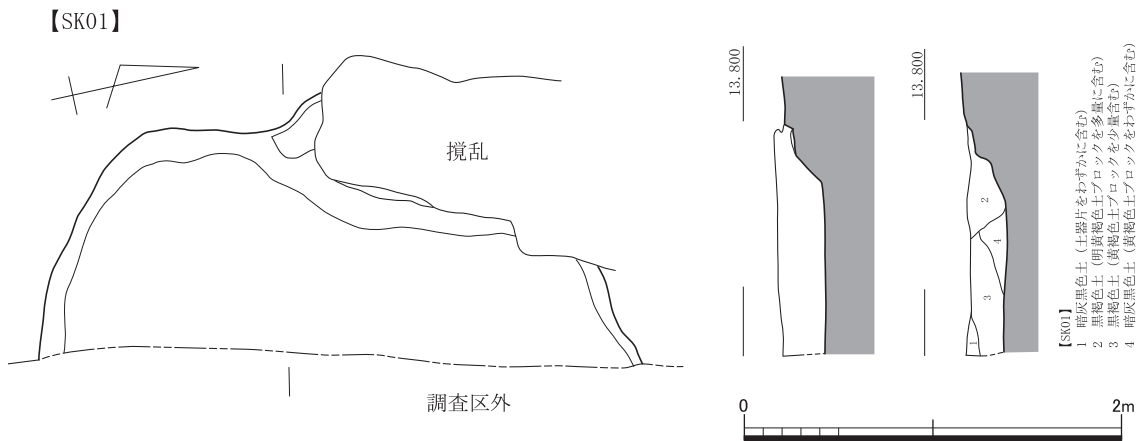
1号土坑 (第9図・図版2)

調査区北東隅に位置し、遺構の東半部は調査区外に所在する。5号土坑を切る。上面を耕作時の攪乱で大幅に削平されており、残存状況は非常に悪い。

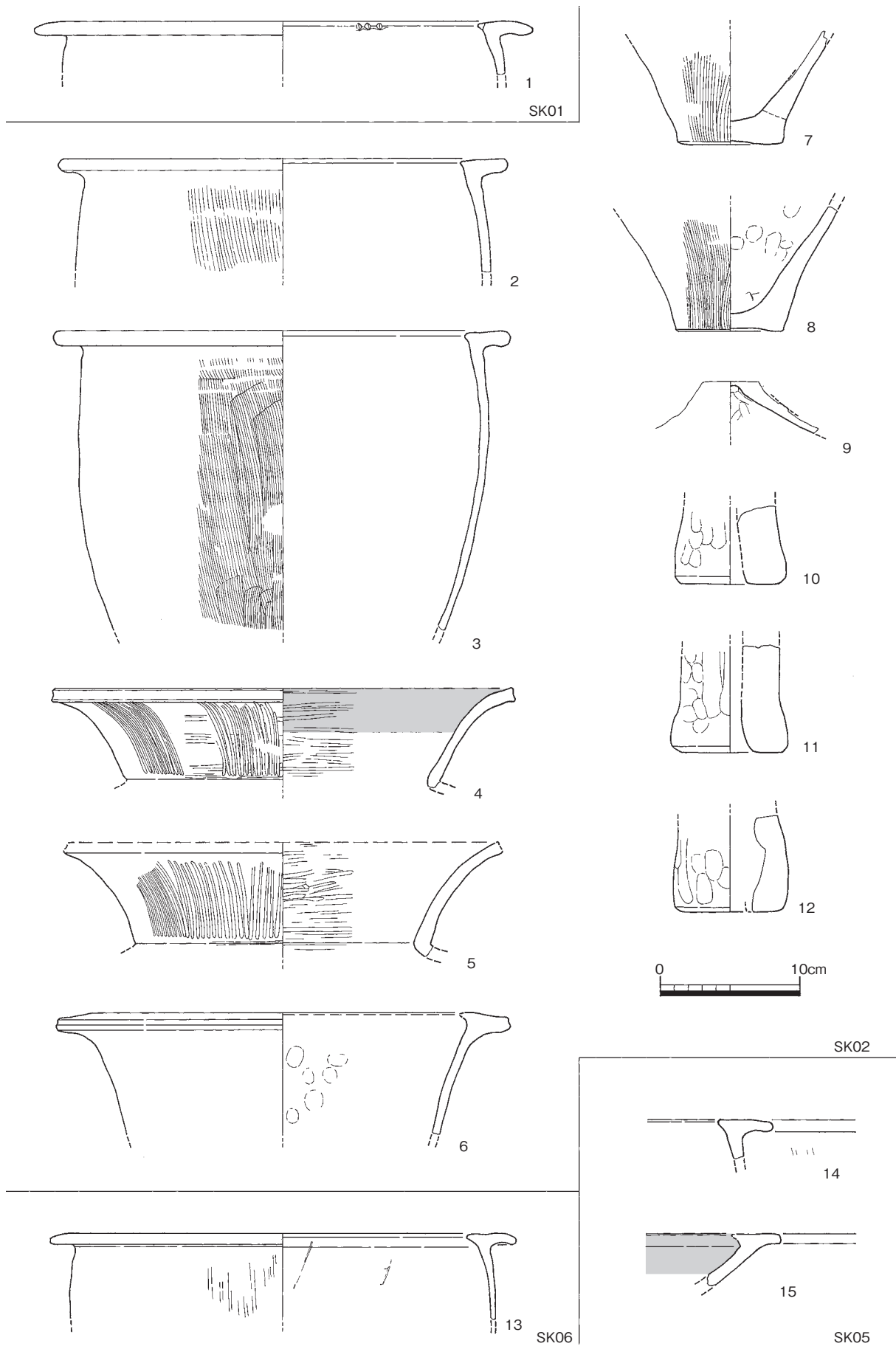
主軸はやや東に振った南北方向、6・11・12号住居と一致すると思われる。平面プランは不整楕円形と想定される。残存長3.15m、残存幅1.9m、深さ20cm以上となる。遺構の平面はほぼ平坦で、西辺中央部に小規模なテラスを持つ。

出土遺物 (第10図)

遺物の出土はごくわずかで、図示できるものは1点のみである。1は甕口縁部の小片。内面に部分的に刻みを施す。



第9図 1・2・5・6号土坑 平・断面図 (S=1/40)



第10图 1·2·5·6号土坑 出土土器 (S=1/4)

2号土坑（第9図・図版3）

調査区西辺中央に位置し、壁面土層から6号住居を切ることを確認しているが、表土掘削の際に誤って上部を削平しているため、ここに掲載している土層断面図と遺構平面図の掘り込みラインは一致しない。遺構の西半部は調査区外に所在する。祭祀土坑の可能性も想定できるが、今回検出した範囲では不明な点が多いため、土坑として報告する。

平面プランは不整円形もしくは楕円形と思われるが、主軸方向は不明である。北東隅にテラス状の構造を、遺構底面に楕円形の掘り込みを持つ。

出土遺物（第10・19図・図版6・7）

今回検出した遺構の中で、もっともまとまった量の遺物が出土している。図示したもののほかにも、弥生土器の甕・壺・支脚が大半を占める。甕は2・3のように口縁端部がやや外反する時期のもの。体部外面には丁寧なタテハケを施す。4～6は壺の口縁部。端部は平坦面を持つものと、6のように鋤型を取るものが混在する。6は外面が黒塗りと思われる。支脚はいずれも破損しており、状態が非常に悪い。10は外面に煤状の痕跡があり、廃棄後火を伴う行為を実施した可能性が示唆される。その他、土製投弾2点が出土している。

5号土坑（第9図・図版3）

調査区北東隅に位置し、遺構の北・東部分は調査区外に所在する。1号土坑と攪乱に切られ、遺構の残存状況は非常に悪い。主軸方向、平面プランは不明である。東西2.2m以上、南北1.7m以上、深さ35cm以上の規模となる。遺構平面はほぼ平坦で、不整円形の掘り込みが複数認められる。

出土遺物（第10図）

少量の土器片が出土するのみである。14は甕の小片。15は高坏の口縁部片で内面に丹塗り痕跡が認められる。いずれも磨滅が激しい。

6号土坑（第9図・図版3）

調査区北西隅に位置し、7・11・12号住居を切る。7号住居の検出時に一括して掘削してしまったため、遺構の南東部は記録が取れていない。

主軸はやや東に振った南北方向で、6・11・12号住居と一致する。平面プランは不整楕円形で、検出した長さ1.5m、幅0.9m、深さ1.0mを測る。本来はフラスコ状の形態であったものが、南北の上部が崩落して現在の形状になったと考えられる。遺構の底面はほぼ平坦で、壁面の立ち上がりは南に傾斜する。

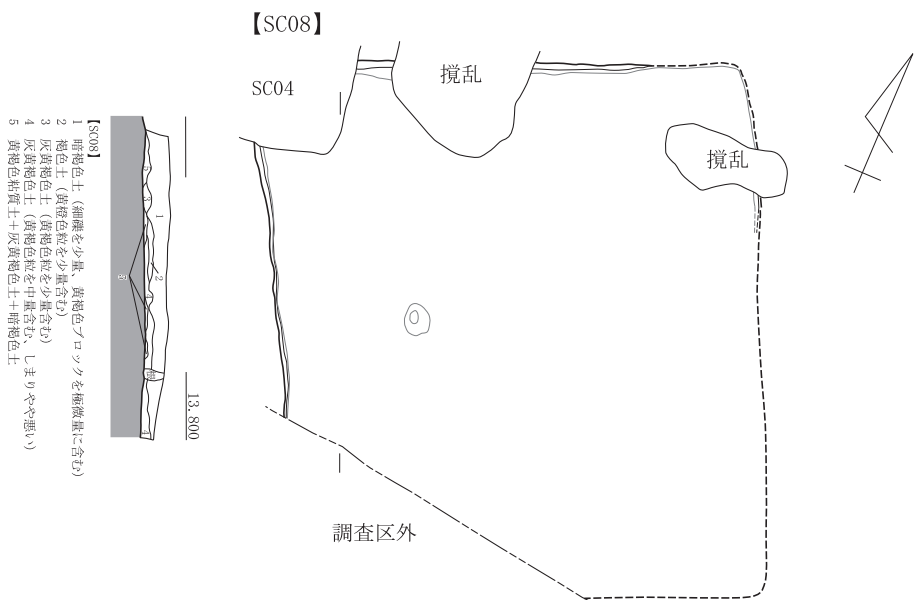
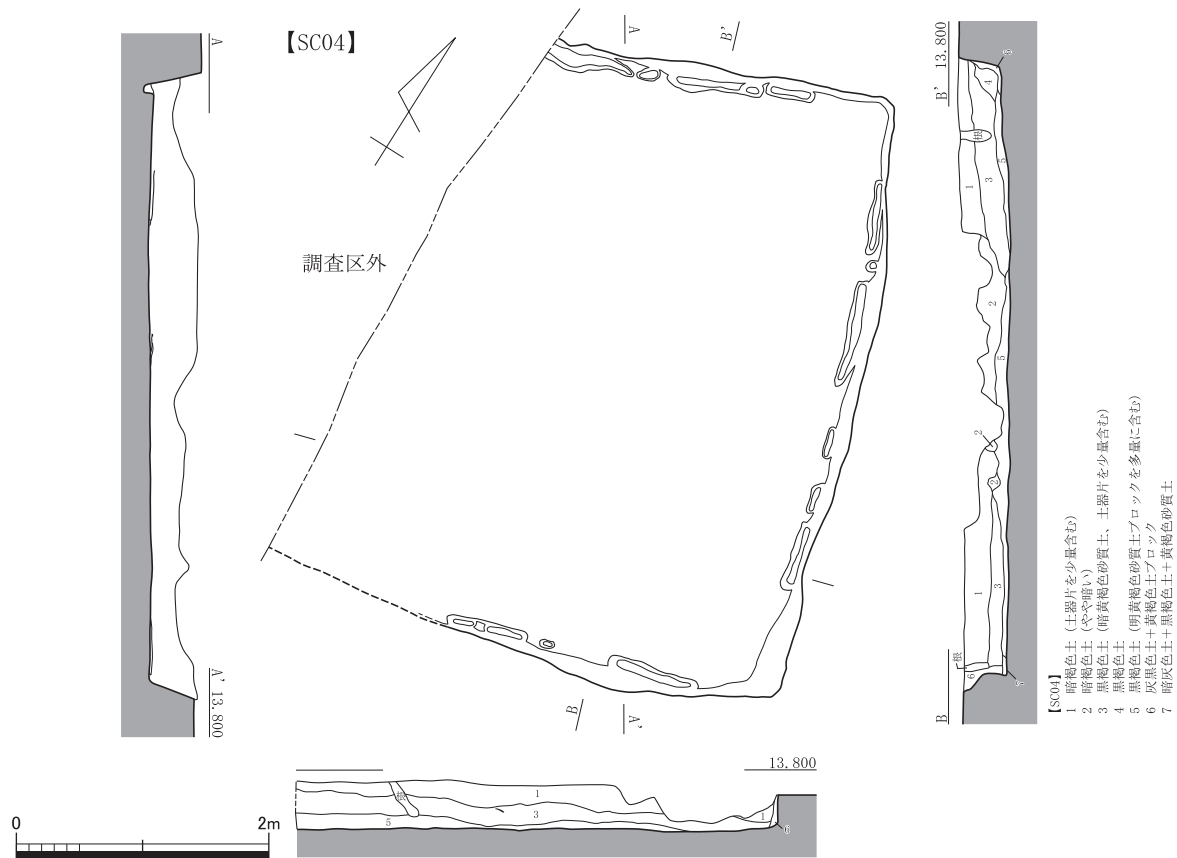
出土遺物（第10図）

遺物の出土はごくわずかであった。13は甕の口縁部。端部はやや垂下し、外面から口縁部の外半にかけて煤の付着が見られる。

【古墳時代の遺構・遺物】

4号住居（第11図・図版3）

調査区南西隅に位置し、遺構の西半部は調査区外に所在する。8号住居、8号土坑に切られ、3号土坑を切る。検出段階では8号土坑が付属施設となる複数住居の切り合いと想定していたが、掘削範囲の拡大を行って単一遺構と判断した。なお掘削時に8号土坑と一括しているため、南辺の一部は記録が取れていない。

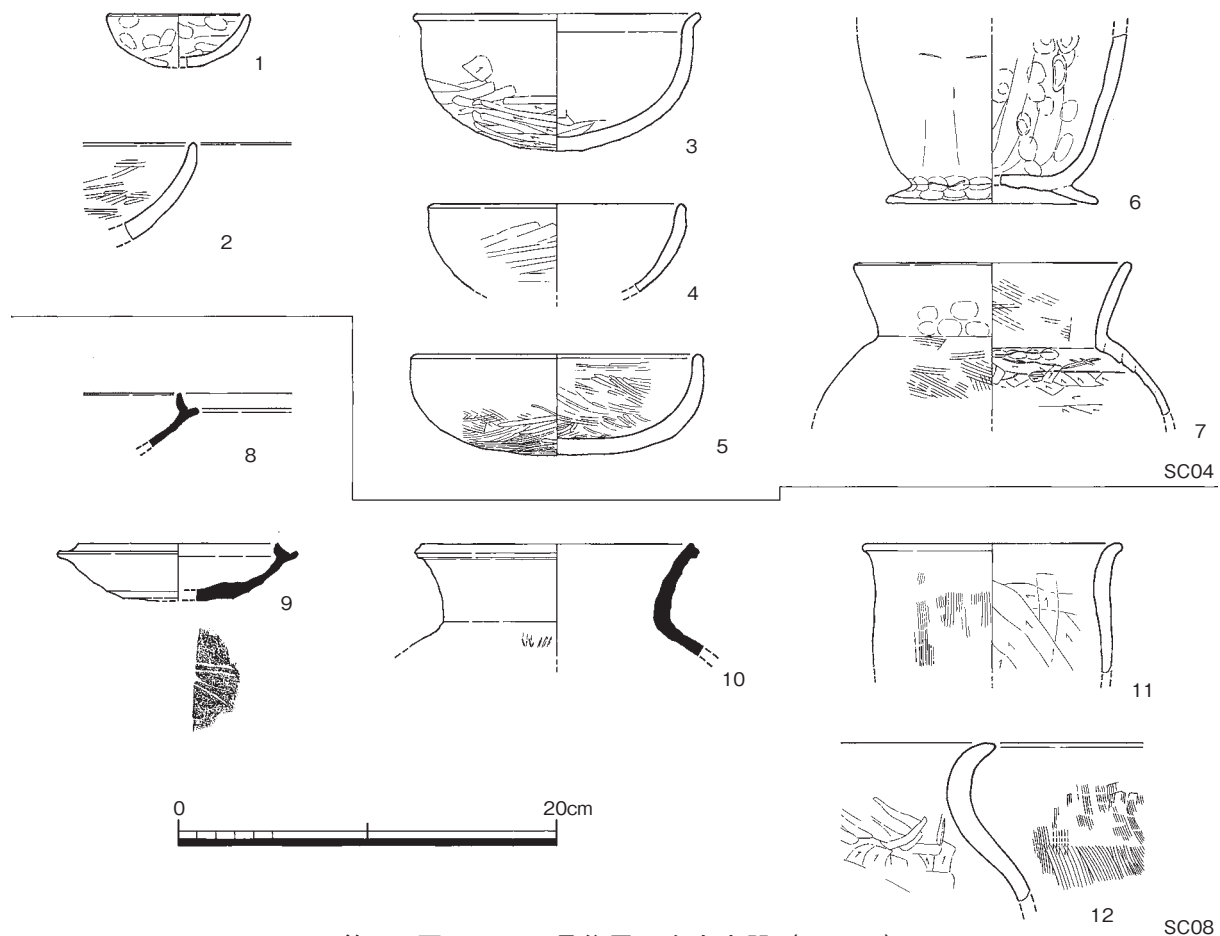


第11図 4・8号住居 平・断面図 (S=1/60)

遺構底面には黄褐色粘質土の貼床が見られたが、非常に薄く、また部分的であった。主軸はやや西に振った南北方向で、本調査区内ではこの遺構のみが指向する。平面プランは方形で、長さ4.9m、残存幅4.2m、深さ35cm以上となる。遺構の隅を除いた各辺に細い溝の掘り込みが認められる。柱穴は検出されなかったことから、ここに壁を設置したと考えられる。

出土遺物 (第12・19図・図版6・7)

1は土師器の小型坏。内外面とも指ナデ痕跡が残る。2～5は土師器の坏。3は口縁端部が外反し、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。2・4・5は内面をミガキで仕上げるもの。6は脚付鉢。脚部



第12図 4・8号住居 出土土器 (S=1/4)

と内面に指オサエが目立つ。内外面とも雑な工具ナデで整形。7は甕の頸部。胴部は薄手に仕上げ、口縁部は直線的に立ち上がる。部分的に煤の付着が認められる。その他、混入品と思われる片岩製の石庖丁片が1点出土している。

8号住居 (第11図・図版3・4)

調査区南端中央部に位置し、遺構の南隅は調査区外に所在する。4・9号住居を切るが、検出時に誤って判断、記録してしまったため、現地記録のまま挿図を作成している。また、9号住居とは検出時に先後関係の把握ができなかったことから、東・南辺に関しては調査区壁面の土層観察から復元ラインを設定している。

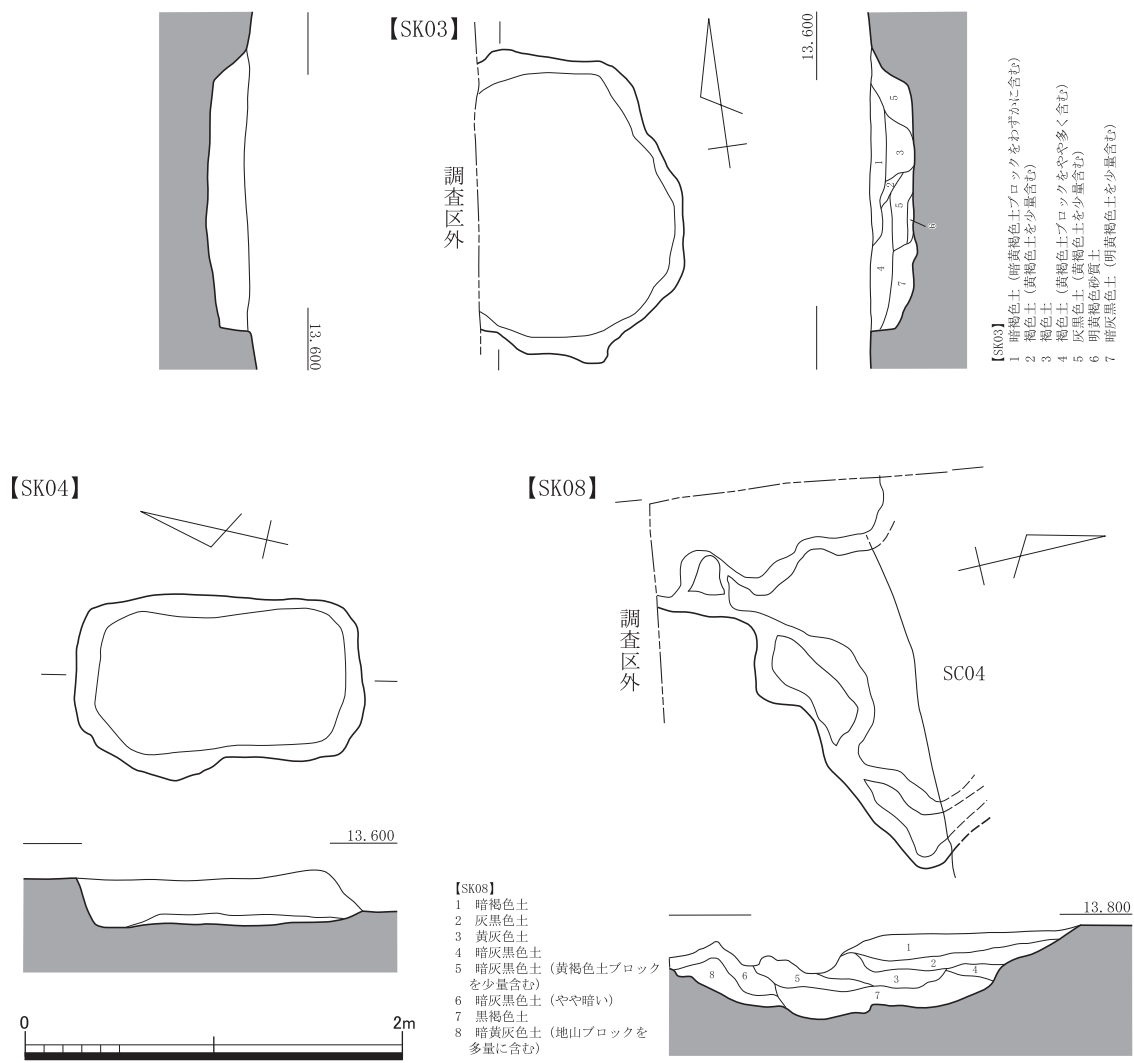
遺構底面にはごく薄い黄褐色粘質土の貼床が認められる。主軸は北西—南東方向で、9・10号住居と一致する。平面プランは方形と思われ、残存長4.2m、想定幅3.8m、深さは20cm以上となる。調査終了後、切り合い関係のある遺構と併せて柱穴の検討を行ったが、この遺構に伴うものは確認できなかった。残存状況が不良のため、付随する掘り込み等も不明である。

出土遺物 (第12図)

8・9は須恵器の坏身。かえりはやや厚ぼったく、内傾して立ち上がる。受け部は水平に近い角度。9は底面にヘラ記号が残る。10は須恵器甕の後円部。端部は肥厚し、断面が三角形に近い。11・12は土師器の甕。口縁部は丸まった形状で、内面のヘラケズリに由来する屈曲は見られない時期のもの。

3号土坑 (第13図・図版4)

調査区北西寄りに位置し、4号住居に切られる。4号住居の付属施設の可能性もあるが、明確な関



第13図 3・8号土坑 平・断面図 (S=1/40)

連性が確認できなかったため、単独の土坑として報告する。

主軸はやや東に振った南北方向と思われ、平面プランは不整円形を呈する。長さ1.7m、残存幅1.2m、深さは20cm以上となる。遺構の底面はほぼ平坦で、人為的な埋戻しを行ったと考えられる。

出土遺物 (第14図・図版6)

1は土師器坏。口縁端部は短く外反する。底部は手持ちヘラケズリ。2は小型の甑。口縁端部は工具ナデにより平坦面をなす。内面は丁寧なヘラケズリを施す。

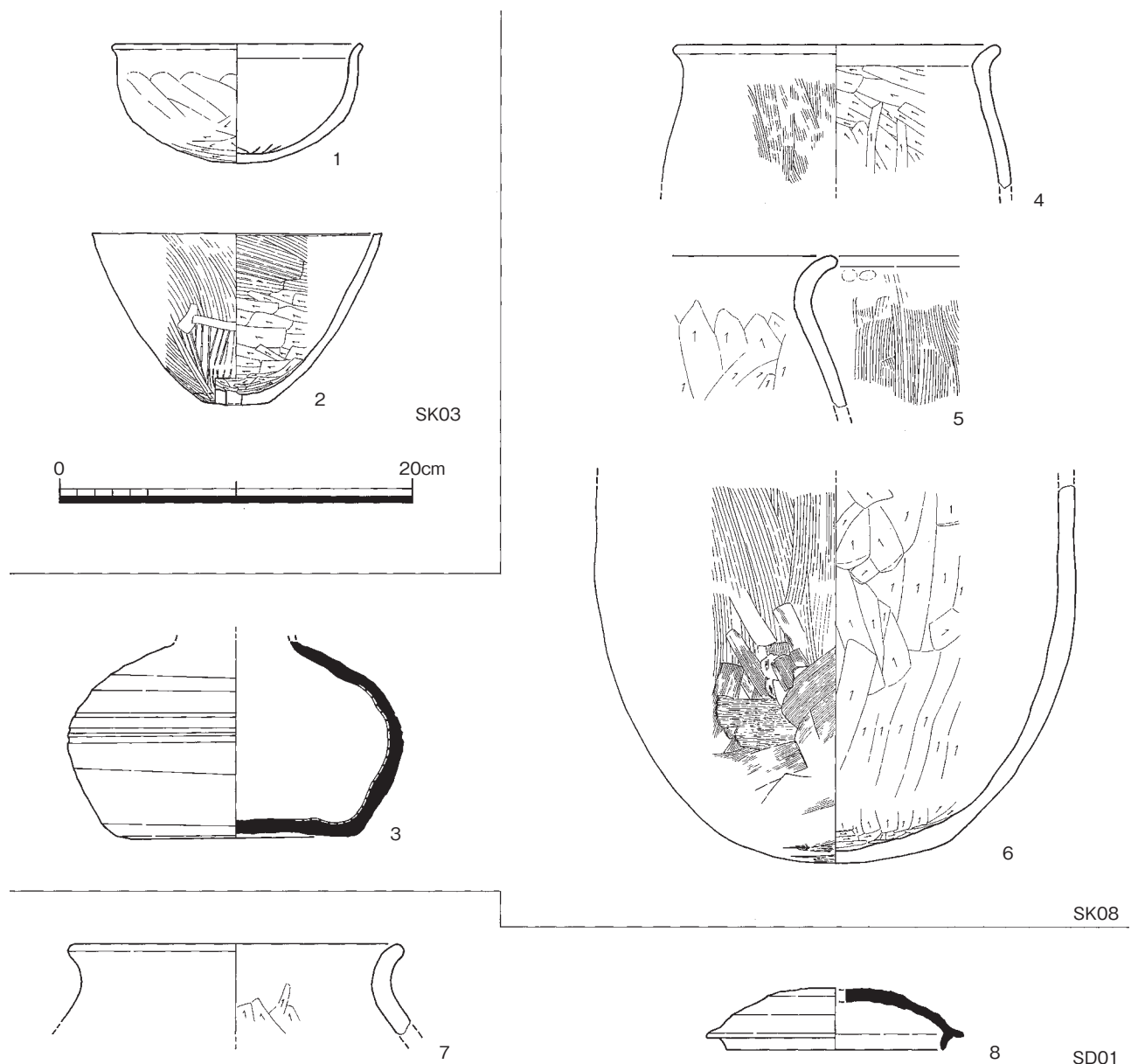
8号土坑 (第13図・図版4)

調査区北西隅に位置し、4号住居を切る。検出当初に4号住居の付随施設と判断し、一括して掘削してしまったため、北半部の記録は取れていない。

主軸、平面プランは不明であるが、南辺は北東—南西方向に延びる。東西残存長2.0m、南北残存幅1.0m、深さ35cm以上となる。遺構の底面は擂鉢状に中央がくぼみ、テラス状の痕跡が多数残る。

出土遺物 (第14図・図版6)

少量の土師器・須恵器が出土している。4～6は土師器甕。口縁部は頸部にヘラケズリ由来の屈曲を持つものと、ゆるく外反するものが混在する。3は須恵器の長頸壺の体部。外面はあばた状で底部と体部に別個体の焼付痕跡が残る。



第14図 3・8号土坑、1号溝 出土土器 (S=1/4)

1号溝 (第3図・図版1)

調査区北半部を弓なりに湾曲して縦断する。6・11号住居を切る。検出段階で全ての住居を切ると判断したが、出土遺物が非常に少なく、7号住居との先後関係は不明瞭である。

溝本体は調査区内で南北ともに断絶し、これと一連の遺構を構成すると思われる掘り込みは認められない。遺構底面は南から北へゆるやかに傾斜する。

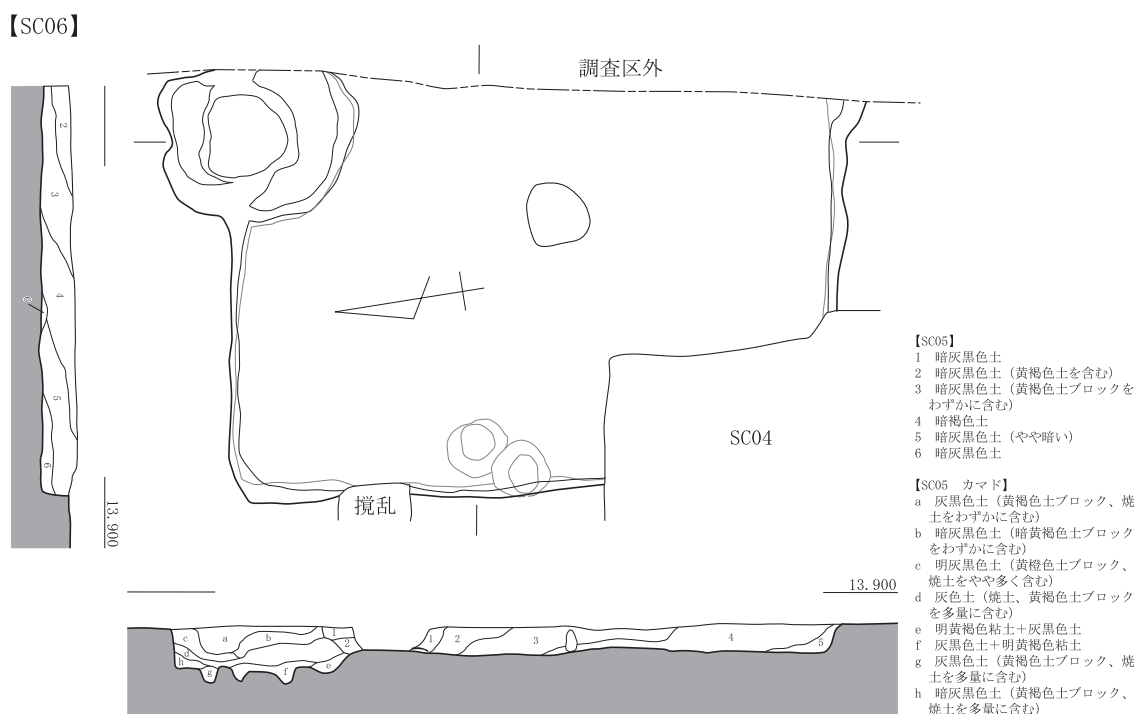
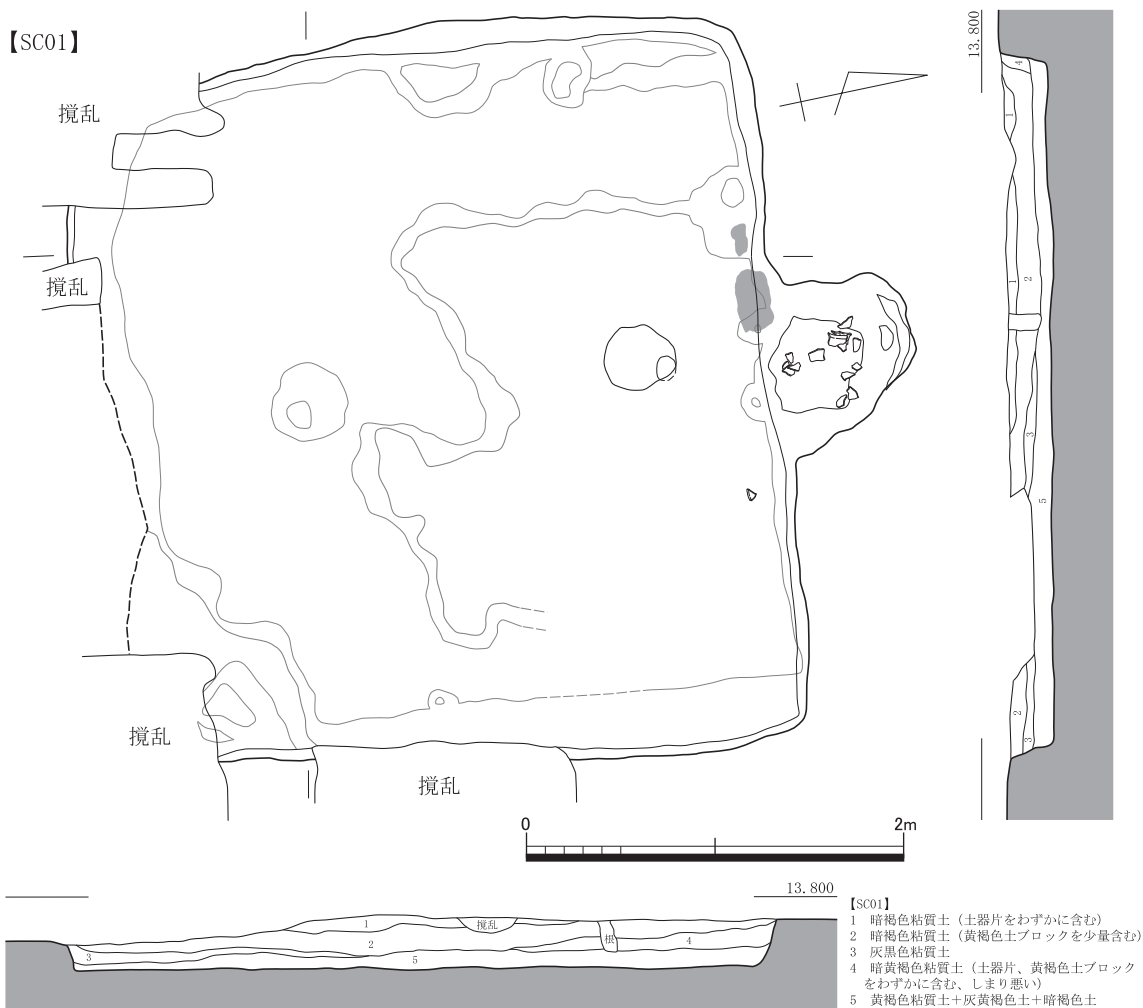
出土遺物 (第14図)

遺物の出土はごくわずかである。7は土師器甕の口縁部片。8は須恵器坏蓋で頂部がやや盛り上がるタイプのもの。

【古代の遺構・遺物】

1号住居 (第15図・図版4)

調査区中央東寄りに位置し、遺構の南辺は攪乱で大幅に削平される。5号住居、4号土坑を切る。掘削時に4号土坑を誤って下層掘り込みと判断し、貼床と一括して掘削してしまったため、北東隅の下層掘り込みは記録できていない。



第15図 1・5号住居 平・断面図 (S=1/4)

遺構底面にはしっかりと黄褐色粘質土の貼床が認められた。主軸はほぼ南北方向で、5号住居と一致する。平面プランは北辺中央にカマド由来のでっぱりを持つ隅丸方形で、長さ最大4.25m、幅3.95m、深さ25cmを測る。柱穴は確認できていないが、主軸に沿って径40cm前後のピット2基を検出している。カマドに相当する部分には袖の粘土等は残存していなかったが、西側の屈曲部付近に焼土の広がりが見られ、でっぱり部分からはまとまった量の土器が出土した。貼床下層には、東西・南の3辺に沿って幅広の溝状の掘り込みがある。

出土遺物（第17図）

カマドと埋土から土師器・須恵器が出土しているが、破片資料が多い。1・2は須恵器の坏蓋。端部が直立に近い状態で立ち上がり、頂部が平坦になる新しい時期のもの。甕は3～5のように胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が肥厚して外反するものと、頸部から広がった胴部を持つものが混在する。

5号住居（第15図・図版4・5）

調査区中央東寄りに位置し、遺構の東半部は調査区外に所在する。1号住居に切られる。上面は攪乱によって大幅に削平を受けており、遺構の残存状況は悪い。

遺構底面には黄褐色粘質土の貼床が見られたが、非常に薄く、部分的であった。主軸はほぼ南北方向で、1号住居と一致する。平面プランは北辺中央部にカマドの一部であるでっぱりを有する隅丸方形で、長さ最大3.7m、残存幅2.2m、深さ20cm以上となる。床面・貼床下層から柱穴は確認できなかった。カマド周辺に袖部や焼土等は認められない。

出土遺物（第17・18図・図版6・7）

遺物の出土はごく少量であった。7・8はいずれも須恵器の坏蓋。7は端部がくの字に屈曲するもの。8は端部の立ち上がりほとんど見られず、扁平な形をとる新しいもの。1は砂岩の砥石。研面は4面で、使用によって撥型に変形している。整形目的の敲打痕と見られる痕跡があばた状に残る。

7号住居（第16図・図版5）

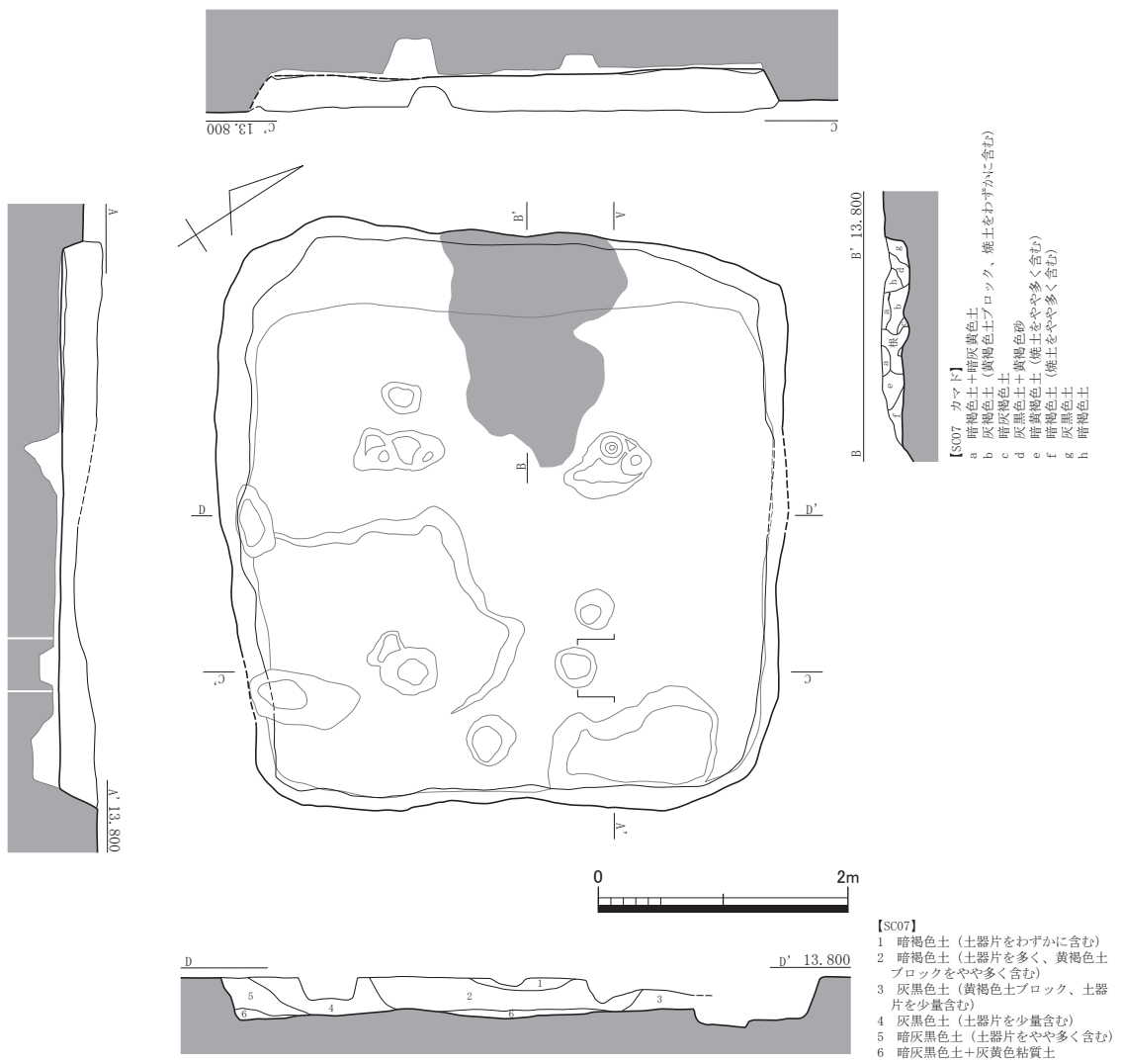
調査区北西寄りに位置し、11・12号住居、6号土坑を切る。検出段階では1号溝にも切られると判断したが、溝からの出土遺物がごく少量のため先後関係は不明瞭である。

主軸はやや東に振った南北方向だが、弥生時代の遺構とは方位が異なる。長さ4.5m、幅4.55m、深さ30cm以上となる。柱穴は4穴確認しているが、形状は不整形で若干ひずみがある。遺構底面には黄褐色粘質土の貼床が見られたが、位置によって厚さにやや差がある。下層には北東隅に土坑状の、北・西辺に沿って幅広の溝状の掘り込みが見られる。カマドの明瞭な痕跡は認められないが、西辺中央部にまとまった焼土の広がりが確認できたことから、この位置にカマドが設置されていたと考えられる。

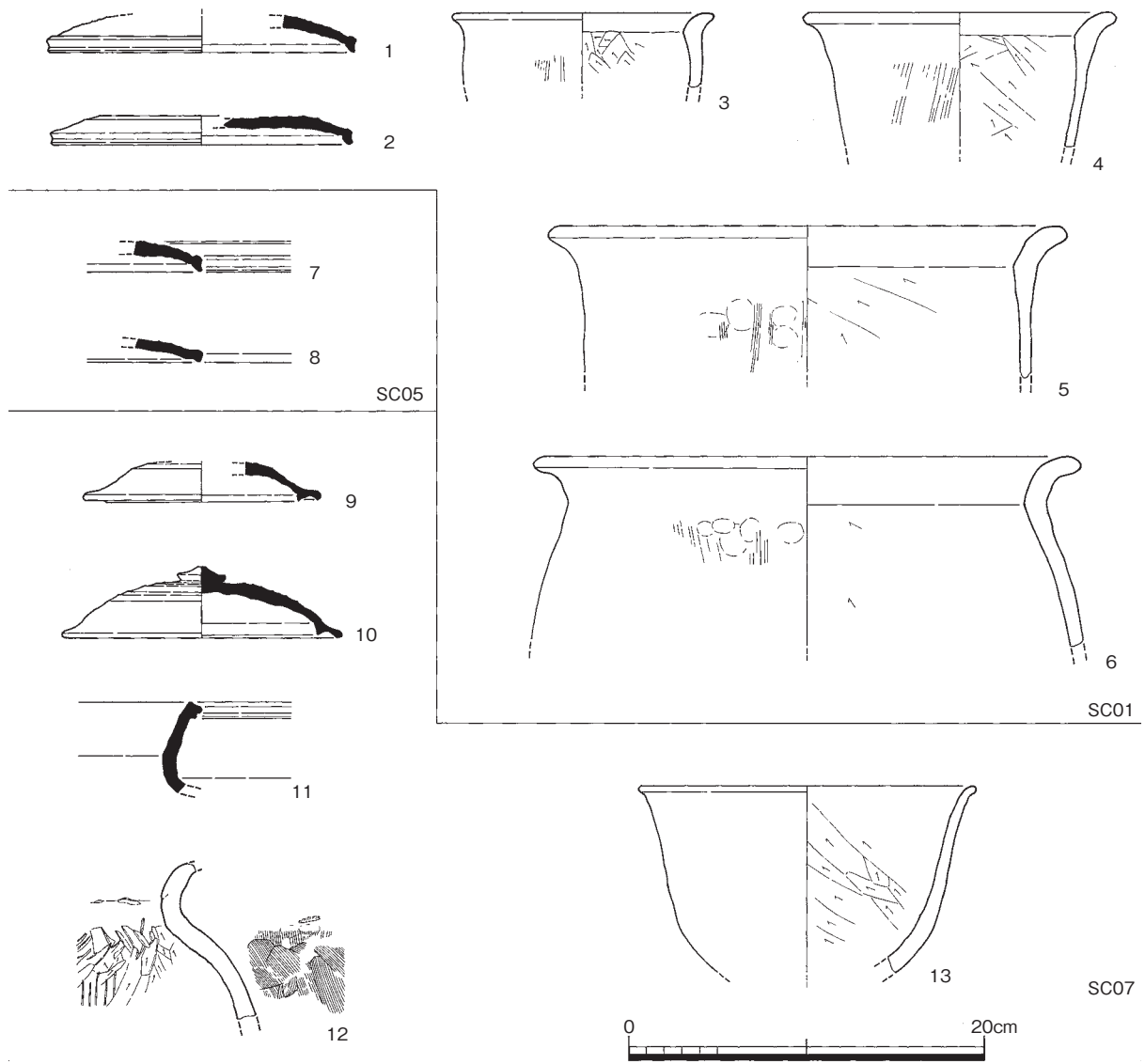
出土遺物（第17・19図・図版6・7）

埋土から少量の遺物が出土しているが、いずれも破片資料である。9・10は須恵器の坏蓋。内傾する短いかえりが残る、古手のもの。9は天井部が平坦となり、10は宝珠型つまみを持つ。11は瓶類の頸部。外面にななめ方向のへら記号が部分的に見られる。12は土師器の甕。頸部内面に粘土帯の接合痕とケズリ用工具の端部の痕跡が明瞭に残る。その他、混入品と思われる頁岩質砂岩の石庖丁片と土錘が出土している。

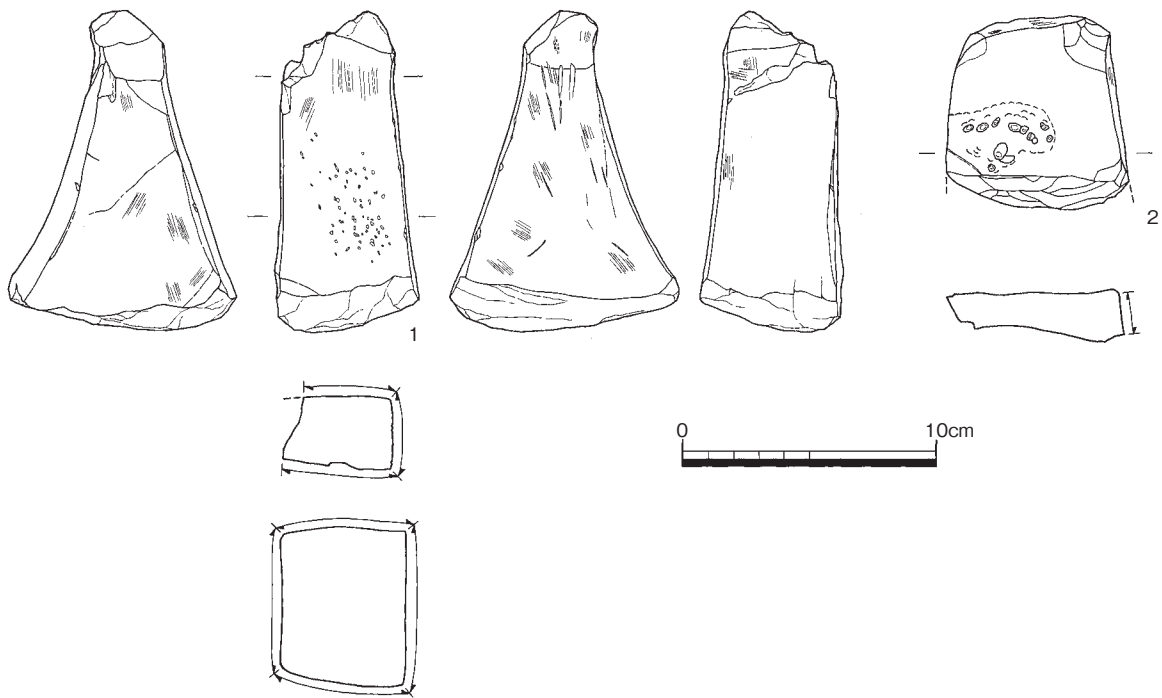
この他、ピットからも少量の遺物が出土しているが、掘立柱建物を構成するものは確認できていない。



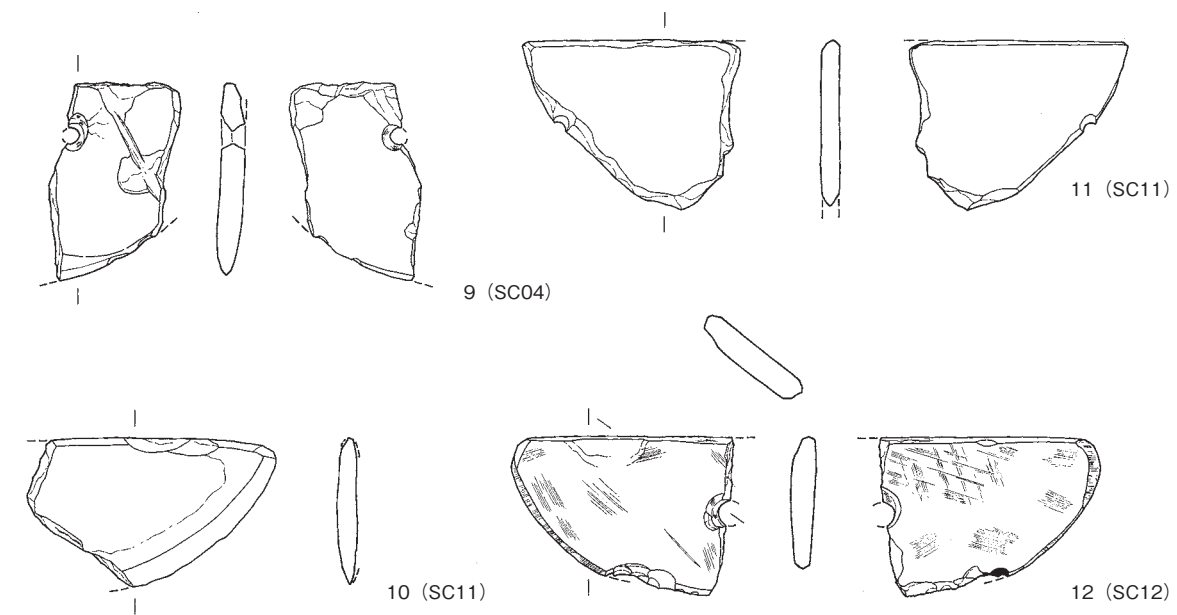
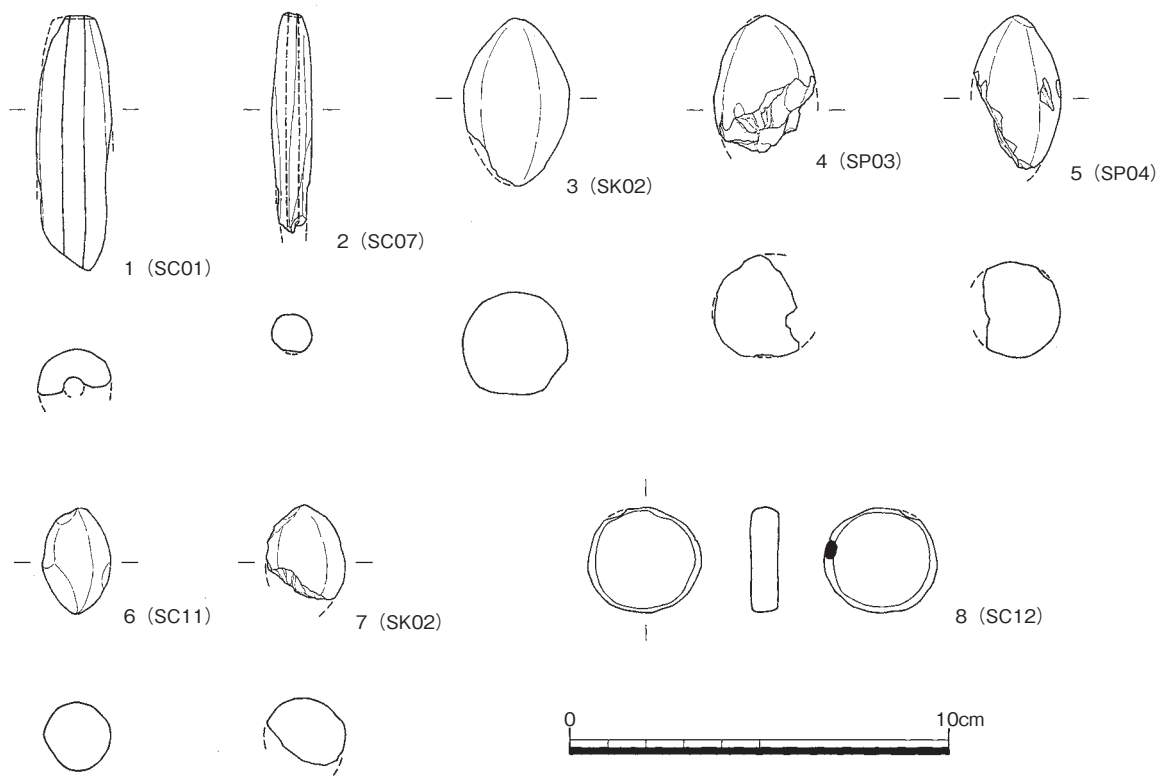
第16図 7号住居 平・断面図 (S=1/60)



第17图 1·5·7号住居 出土土器 (S=1/4)



第18图 出土石器 (1) (S=1/3)



第19図 出土石器・土製品 (2) (S=1/2)

IV. 調査成果のまとめ

大板井遺跡の弥生集落は、遺跡が所在する低台地の南東部分（6・7・12次調査地点）で前期から経営が始まる。集落の規模はそれほど大きくはなく、中期初頭まで継続する。中期前半になると集落規模が劇的に拡大し、竪穴住居群・甕棺墓群・祭祀土坑群を伴う拠点集落の様相を示す。この時期の遺構・遺物は、大板井遺跡のほぼ全域で確認されているが、その密度には差異が見られる。弥生時代中期の遺構の量が最も多い地区が、今回報告した25次調査地点を含む低台地の南西部分である。

居住域と見られる竪穴住居群は、東寄りの1・2・8・9次調査地点に分布しており、台地の落ち際に近い箇所ではやや密度が低くなる。今回調査地点はこの低密度の一部を構成すると考えられる。竪穴住居は1次調査地点で確認されている東西方向のV字溝よりも北では激減することから、ここから台地の先端部までが居住域として分けられていたのであろう。同様の様相は、前期の集落である力武内畑遺跡でも認められる。

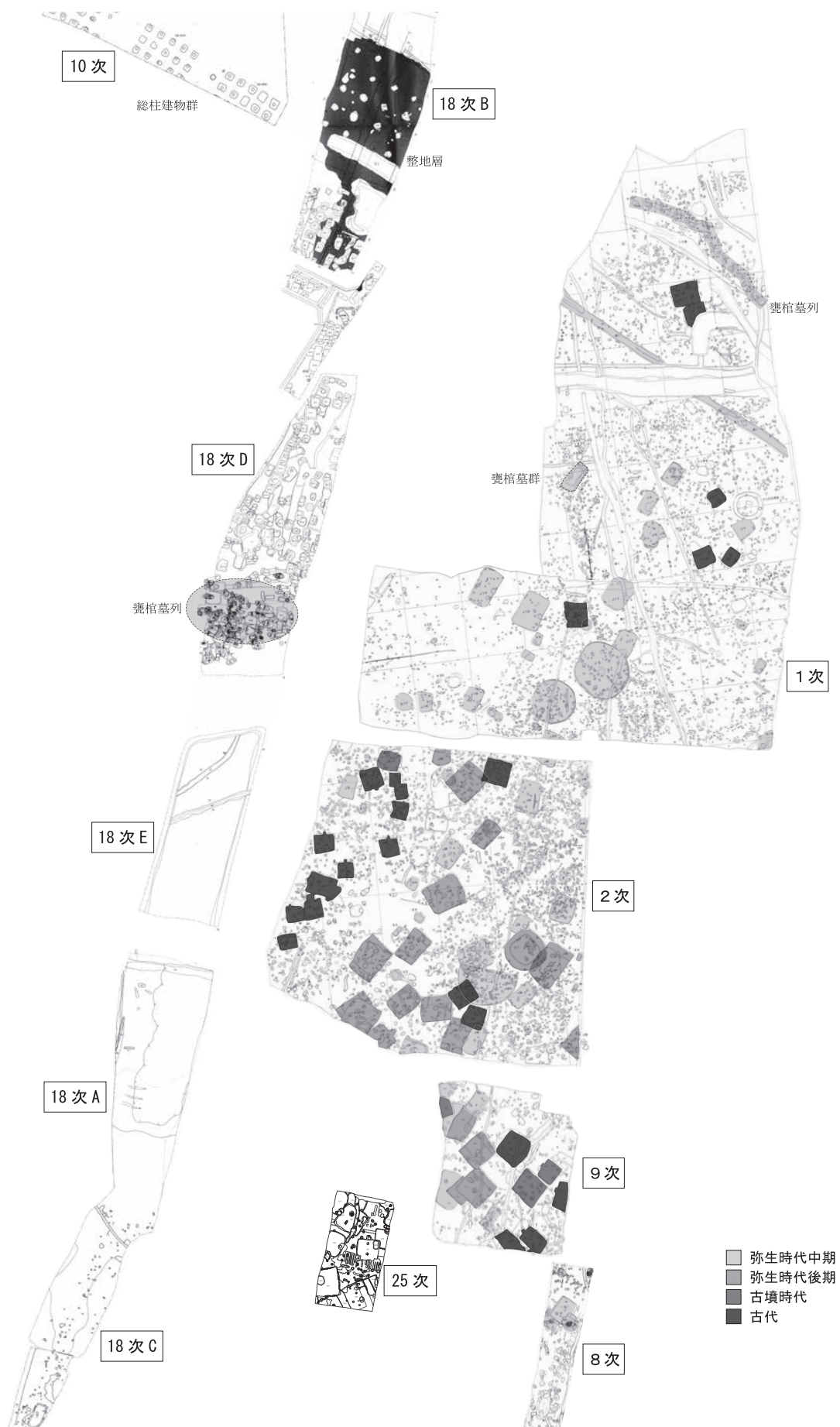
居住域には祭祀土坑も多く見られる。通常祭祀土坑では丹塗・黒塗の土器が出土することが多いが、大板井遺跡では丹塗でないものの比率が高い。その一方で、当時は貴重であった鉄鎌・鉄斧や、鉄製の釣り針なども見つかっている。甘木鉄道敷設土取りの際に発見された銅戈や、小郡若山遺跡の多鈕細文鏡のような祭器の存在はもちろんであるが、祭祀土坑のような居住域内の祭祀の場に貴重品が含まれているのも、当時の集落の権勢を示すものと言えよう。

集落のもうひとつの構成要素である墓域は、前述の居住域周辺を囲むように点在している。1次調査地点で居住域内に見られる甕棺墓群はいずれも小児棺で、居住域から外れた18次調査地点で確認された甕棺墓群と土壙墓・石棺墓は成人用である。このような傾向は、弥生時代前期から他の遺跡でも見られ、当時の共同体のあり方や血縁関係にまつわる思想を考える上で興味深い。また余談となるが、成人棺の密集地では近代以降の墓壙も多数確認されており、この箇所が2000年の時間を隔てた「墓地」であったことが判明している。

弥生時代後期になると、集落の中心は台地の先端部へ移動し、遺構の数も減少する。この次に大板井遺跡が隆盛を迎える古代には、台地の南西縁に沿って住居が分布する傾向が見られる。この時期には、北西に倉庫群や化粧石を伴う版築状整地層が設けられる。これらは近接する小郡官衙遺跡に関連する施設と想定されているが、その目前に位置する大板井遺跡の集落も当然のことながら郡役所の存在を意識して経営されただろう。

今回調査した25次地点では、これまで周辺で確認された遺構とほぼ同時期のものが検出されており、上記の流れの一端をなすものと言える。弥生時代中期の居住域としては最深部に相当するが、この箇所にも竪穴住居と祭祀土坑の可能性のある土坑を確認しており、居住域がここまで延長することが証明された。

本書では広大かつ長期にわたる大板井遺跡の営みのごく一部しか取り上げられなかったが、これまでの調査成果を面的にも捉えることで、遺跡の特色や当時の社会状況の解明に今後つながることが期待される。



第 20 図 周辺調査地検出遺構 (S = 1/1,000)

出土遺物観察表

法量＝口：口径、高：器高、底：底径、径：直径
器種＝弥生：弥生土器、土：土師器、須：須恵器

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm・g (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測番号
第5図1		SC06	弥生・壺	口:(31.2) 残存高:17.5	外:にぶい黄橙色 内:橙色～灰褐色	微粒～3mmの砂粒を多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケ 内:ヨコナデ、指オサエ		外面下部に煤、内面下部に炭化物付着。	2
第5図2		SC06	弥生・壺	口:(32.3) 残存高:16.8	外・内:橙色	微粒～3mmの砂粒を多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケ、一部その後ヨコナデ 内:ヨコナデ、指オサエ		口縁部に部分的に煤付着。	3
第5図3		SC06 北東部下層	弥生・壺	底:(7.8) 残存高:13.1	外:灰褐色～にぶい黄橙色 内:にぶい黄褐色	微粒～5mmの砂粒を多く含む	良好	外:タテハケ 内:ナデ 底:ナデ	底1/4	外面に煤、内面に炭化物付着。	6
第5図4		SC06 北東部	弥生・ミニチュア	残存高:4.35	外:にぶい黄橙色～暗灰色 内:にぶい黄褐色	微粒～1mmの砂粒を含む	良好	外:工具ナデ		器台か?	15
第5図5		SC06 北西部	弥生・無頸壺	残存高:5.0	外:赤褐色～黒褐色 内:橙色	微砂粒を含む	良好	口:ヨコナデ 外:ヨコミガキ 内:ヨコナデ、ナデ		外面・口縁部内面に丹塗り。	10
第5図6		SC06 北東部下層	弥生・鉢	口:(7.9) 高:7.95 底:(5.4)	外:赤褐色 内:橙色	微砂粒を含む	良好	口:ヨコミガキ 外:タテミガキ 内:ヨコナデ、ナデ、指オサエ	3/4	外面・口縁部内面に丹塗り。	9
第5図7		SC06	弥生・鉢	底:(10.8) 残存高:15.7	外:褐灰色 内:にぶい黄褐色～褐灰色	微粒～1mmの砂粒を多く含む	良好	外:工具ナデのちナデ 内:ナデ、指オサエのちナデ 底:工具ナデ			11
第5図8		SC06 南東部下層	弥生・壺	口:(36.4) 残存高:14.9	外:にぶい赤褐色 内:赤褐色～暗赤褐色	微粒～1mmの砂粒を多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテミガキ 内:ヨコミガキ		外・内面に丹塗り。	8
第8図1		SC11 ベルト	弥生・鉢	底:(11.5) 残存高:8.5	外・内:にぶい橙色	微粒～1mmの砂粒を多く含む	良好	外:ナデ? 内:ナデ、指オサエ 底:ナデ			1
第8図2		SC12 北半	弥生・鉢	残存高:4.1	外:橙色 内:橙色	微砂粒を僅かに含む	良好	外:ヨコハケのちヨコナデ、タテハケのちヨコナデ 内:ナデ、指オサエ 底:ナデ	1/4弱		8
第8図3		SC12 北半	弥生・壺	口:(29.4) 残存高:15.8	外:灰黄褐色～黒色 内:灰黄褐色～黒褐色	微粒～2mmの砂粒を多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:ミガキ、ヨコナデ、ミガキヨコミガキ 内:ミガキ ヨコミガキ	口1/4	丹塗り、暗文を施す。	6
第8図4		SC12	弥生・壺	口:(35.0) 高:15.4	外:赤褐色 内:赤褐色～暗赤褐色、橙色	微粒～3mmの砂粒を多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケ 内:ナデ	1/5		6
第8図5		SC12	弥生・壺	底:(7.7) 残存高:7.0	外:明赤褐色 内:明赤褐色	微粒～3mmの砂粒を含む	良好	外:ナデ 底:ナデ 内:指オサエ、ナデ	底1/6	外面丹塗り。	4
第8図6		SC12 北半	弥生・壺	底:(10.4) 残存高:10.3	外:にぶい黄褐色～黒色 内:灰黄褐色	1mm以下の微砂粒を多く含む	良好	外:タテハケ 底:ナデ 内:ナデ	底1/4	外面に著しい煤の付着。内面に炭化物の付着。	1
第8図7		SC09 貼床内	弥生・壺	残存高:8.3	外:にぶい黄褐色 内:にぶい褐色	微粒～3mmの砂粒を多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケのち一部ヨコナデ 内:ヨコハケのち一部ヨコナデ			2
第8図8		SC09	弥生・壺	底:(7.4) 残存高:4.5	外:にぶい橙色～暗灰色 内:にぶい褐色	微粒～3mmの砂粒を含む	良好	外:ミガキ 内:工具ナデ 底:ミガキ			3
第8図9		SC10 南半部	弥生・壺	口:(27.0) 底:9.4 高:19.1	外:にぶい黄褐色～黄灰色 内:にぶい黄褐色	微粒～3mmの砂粒を多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:タタキのちハケ 内:タテ・ヨコハケ		外面に薄い黒斑。	1
第10図1		SK01 南半部	弥生・壺	口:(35.6) 残存高:3.8	外:灰黄褐色～褐灰色 内:灰黄褐色	微粒～2mmの砂粒を多く含む	良好	口・外・内:ヨコナデ			2
第10図2		SK02 No.3	弥生・壺	口:(32.1) 残存高:21.3	外:にぶい黄褐色 内:にぶい赤褐色	主に微粒～2mmの砂粒を多く含むが6mmの大きな砂粒も含まれる	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケ後ヨコナデ、タテハケ 内:ナデ	1/3	内面が2次焼成のため赤変している。	2
第10図3		SK02 No.29	弥生・壺	口:32.7 残存高:21.4	外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	微粒～3mmの砂粒を含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケ後ヨコナデ、タテハケ 内:ナデ、タテナデ	2/3	外面僅かに煤付着。内面炭化物の付着。	1
第10図4		SK02 No.16	弥生・壺	口:(33.1) 残存高:7.0	外:橙色 内:橙色	微粒～3mmの砂粒を多く含む	良好	口:ヨコナデ、ヨコミガキ 外:ヨコミガキ、タテナデ、ヨコミガキ 内:ヨコミガキ	1/2	暗文を施す。丹塗りの可能性あり。	7
第10図5		SK06 ベルト	弥生・壺	口:(31.4) 残存高:8.2	外:明赤褐色 内:にぶい赤褐色	微粒～4mmの砂粒を多く含む	良好	外:ヨコナデ、ナデ、ヨコミガキ 内:ヨコミガキ	1/6弱	暗文を施す。	9
第10図6		SK02 壁際	弥生・壺	口:(32.4) 残存高:8.7	外:褐灰色～灰褐色 内:にぶい黄褐色	微粒～3mmの砂粒を含む	良好	口:ヨコナデ 外:ヨコミガキ 内:ヨコナデ、ナデ、指オサエ	1/4	黒塗りの可能性あり。	8
第10図7		SK02 下層	弥生・壺	底:7.6 残存高:8.1	外:灰褐色 内:黒褐色	微粒～5mmの砂粒を多く含む	良好	外:タテハケ 内:ナデ 底:ナデ	底部1	内面全て黒斑。外面僅かに赤変している。	4
第10図8		SK02 No.37	弥生・壺	底:7.7 残存高:9.0	外:褐灰色 内:にぶい褐色	微粒～6mmの砂粒を含む	良好	外:タテハケ 内:ナデ、指オサエ、工具痕 底:雑なナデ	底部1/2	内面僅かに炭化物付着。	5
第10図9		SK02 No.8	弥生・壺	残存高:3.7	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	微粒～4mmの砂粒を主に含むが7mmの大きい砂粒も含まれる	良好	外:ナデ 内:ナデ、指オサエ		器表面剥落している。	12
第10図10		SK02 No.38	弥生・支脚	底:8.9 残存高:6.7	外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	主に微砂粒を多く含むが2～3mmの砂粒も僅かに含む	良好	外:ナデ、指オサエ 内:ナデ		全体的に若干楕円形をしている。煤状の黒色痕跡あり。	15
第10図11		SK02 No.38	弥生・支脚	底:8.3 残存高:7.7	外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	主に微砂粒を多く含むが2～3mmの砂粒も僅かに含む	良好	外:ナデ、指オサエ 内:ナデ		煤状の黒色痕跡あり。	14
第10図12		SK02 No.35	弥生・支脚	底:7.7 残存高:7.9	外:にぶい褐色	微砂粒を含む	良好	外:ナデ、指オサエ		煤状の黒色痕跡あり。	16
第10図13		SK06 ベルト	弥生・壺	口:(33.4) 残存高:6.1	外:褐色 内:にぶい黄褐色	微粒～2mmの砂粒を含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケのち一部ヨコナデ 内:ヨコナデ、工具ナデ		外面に煤付着。	1
第10図14		SK05	弥生・壺	残存高:2.9	外・内:褐色	微粒～3mmの砂粒を含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケのちヨコナデ 内:ナデ			1

挿入 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量cm・g (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	残存率	備考	実測 番号
第10図 15		SK05	弥生・高坏	残存高:3.8	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色 ~明赤褐色	微粒~4mmの砂粒を 含む	良好	外:ミガキ 内:ヨコミガキ?		内面に丹塗り痕跡。	2
第12図 1		SC04 北東部	土・小型坏	口:(7.5)	外・内:にぶい橙色	微粒~2mmの砂粒を 多く含む	良好	口:ヨコナデ	1/4		10
第12図 2		SC04	土・坏	残存高:5.0	外:橙色~黄灰色 内:にぶい褐色	微砂粒、2mmの砂粒を 少量含む	良好	口:回転ナデ 外:工具ナデ? 内:ヨコミガキ			11
第12図 3		SC04 南半部 貼床	土・坏	口:(15.2) 高:7.9	外・内:明赤褐色	微砂粒、2~3mmの砂 粒を少量含む	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコ・不定方向の工具ナデ 底:手持ちヘラケズリのち粗いミガ キ	1/4		5
第12図 4		SC04 北東部	土・坏	口:(13.6) 残存高:4.5	外:橙色 内:にぶい橙色	微粒~2mmの砂粒を 含む	良好	口:ヨコナデ 外:粗いミガキ 内:ナデ?	1/4弱		9
第12図 5		SC04 北西部	土・坏	口:(15.4) 高:5.3	外:明赤褐色~橙 色 内:褐色	微砂粒を含む	良好	口:ヨコナデ 外:ヨコミガキ、不定方向ハケのち 粗いミガキ 内:ヨコ・不定方向のミガキ	2/3	外面に黒斑。	8
第12図 6		SC04 南西部	土・脚付鉢	底:(11.2) 残存高:8.9	外:にぶい赤褐色 ~にぶい褐色 内:にぶい黄褐色	微粒~2mmの砂粒を 含む	良好	外:工具ナデ 内:指オサエ、工具ナデ 底:ナデ、工具ナデ	1/4	外面被熱による赤変。	7
第12図 7		SC04 北東部	土・壺	口:(14.7) 残存高:7.9	外:灰黄褐色~黒 褐色 内:にぶい黄褐色	微粒~4mmの砂粒を 多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:指オサエ・ヨコナデ、ヨコ・ナナメ ハケ 内:ヨコハケ、ヘラケズリ		頸部~体部にわずかに 煤附着。	1
第12図 8		SC08・09 南半部 上層	須・坏身	残存高:(2.9)	外・内:灰色	微粒~2mmの砂粒を 含む	良好	口:回転ナデ 外:回転ナデ 内:回転ナデ			7
第12図 9		SC08・09 南半部 上層	須・坏身	口:(10.6) 高:3.0	外・内:灰色	微粒~3mmの砂粒を 含む	良好	口:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデのちナデ		底部にヘラ記号。	6
第12図 10		SC08・09 南半部 上層	須・壺	口:(15.0) 残存高:6.0	外:灰色 内:灰黄色	微粒~3mmの砂粒を 含む	良好	口:回転ナデ 外:タタキ 内:ナデ			4
第12図 11		SC08・09 南半部 上層	土・壺	口:(13.7) 残存高:6.8	外:にぶい褐色 内:灰褐色~黒褐 色	微砂粒を多く含む	良好	外:タテハケ 内:ヘラケズリ			2
第12図 12		SC09 南ベルト	土・壺	残存高:(8.4)	外・内:にぶい褐色	微粒~1mmの砂粒を 多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケのち一部ヨコナデ 内:工具ナデ、ヘラケズリ			1
第14図 1		SK03	土・坏	口:(14.2) 高:6.7	外・内:橙色	微粒~2mmの砂粒を 含む	良好	口:ヨコナデ 外:ナデ、手持ちヘラケズリ 内:工具ナデ			3
第14図 2		SK03	土・甌	口:(16.4) 底:3.7 高:9.7	外:にぶい褐色 内:褐色	微粒~6mmの砂粒を 非常に多く含む	良好	口:工具ナデ 外:タテハケのち一部粗いナデ 内:ヨコハケ、ヘラケズリ			4
第14図 3		SC03 カマド北東	須・壺	底:13.5 残存高:11.1	外・内:灰色	微粒~6mmの砂粒を 非常に多く含む	良好	外:回転工具ナデ、沈線3条 内:回転ナデ 底:工具ナデ		外面に別個体の焼付あ り。	3
第14図 4		SC04 貼床内	土・壺	口:(18.6) 残存高:8.1	外・内:明赤褐色	微粒~5mmの砂粒を 多く含む	良好	外:タテハケ			2
第14図 5		SC04 南西部	土・壺	残存高:8.5	外:明赤褐色 内:明赤褐色~に ぶい黄褐色	微粒~3mmの砂粒を 多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケのち一部ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ			3
第14図 6		SK08	土・壺	底:(12.6) 残存高:21.3	外:褐色~黒褐色 内:にぶい黄褐色	微粒~3mmの砂粒を 含む	良好	外:タテハケ 内:ヘラケズリ 底:工具ナデ	底1/3	外面に著しい煤の付 着。	1
第14図 7		SD01 北半部	土・壺	口:(19.0) 残存高:5.1	外・内:明赤褐色	微砂粒を含む	良好	口:ヨコナデ 外:ナデ 内:ヘラケズリ			1
第14図 8		SD01 北半部	須・坏蓋	口:(12.3) 高:3.5	外・内:灰色	微粒~2mmの砂粒を 含む	良好	口:回転ナデ 外:回転ナデ、回転ヘラ切り 内:回転ナデ、不定方向のナデ	1/4		3・4
第17図 1		SC01 P2	須・坏蓋	口:(17.4) 残存高:2.1	外:灰色 内:黄灰色	微砂粒を含む	良好	口:回転ナデ 頂:回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、不定ナデ	1/8		11
第17図 2		SC01 カマド	須・坏蓋	口:(17.0) 残存高:1.05	外・内:黄灰色	微砂粒を含む	良好	口:回転ナデ 頂:回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	1/8		10
第17図 3		SC01 上層	土・壺	口:(14.6) 残存高:4.1	外:明赤褐色 内:褐色~にぶい 黄褐色	微粒~5mmの砂粒を 含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケのちヨコナデ 内:ヘラケズリ			2
第17図 4		SC01 カマド	土・壺	口:(17.6) 残存高:7.5	外・内:褐色	微粒~8mmの砂粒を 多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:タテハケ 内:ヘラケズリ			1
第17図 5		SC01 貼床内	土・壺	口:(29.2) 残存高:8.6	外:褐色 内:明赤褐色	微粒~6mmの砂粒を 多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:指オサエ・タテハケ 内:ヘラケズリ			4
第17図 6		SC01 カマド	土・壺	口:(30.8) 残存高:10.6	外:褐色~褐色 内:にぶい褐色	微粒~7mmの砂粒を 多く含む	良好	口:ヨコナデ 外:ヨコナデ、指オサエ・タテハケ 内:ヘラケズリ		体部外面にわずかに煤 附着。	3
第17図 7		SC05 北西部 貼床	須・坏蓋	残存高:1.7	外・内:黄灰色	微砂粒をわずかに含 む	良好	口:回転ナデ 頂:回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、不定ナデ			2
第17図 8		SC05 北西部	須・坏蓋	残存高:1.2	外・内:灰黄色	微砂粒、3mmの砂粒を わずかに含む	やや 不良	口:回転ナデ 頂:回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、不定ナデ			3
第17図 9		SC07 南西部	須・坏蓋	口:(11.0) 残存高:2.2	外:灰褐色 内:黄灰色	径1mm以下の砂粒を 多く含む。	不良	口:回転ナデ 頂:回転ヘラケズリ? 内:回転ナデ、不定ナデ	1/4		10
第17図 10		SC07	須・坏蓋	口:(13.0) 高:3.8	外:灰黄色 内:浅黄色	微粒~7mmの砂粒を 非常に多く含む	やや 不良	口:回転ナデ 頂:回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、ナデ			9
第17図 11		SC07 南東部	須・瓶	残存高:5.1	外・内:暗灰色	微粒~3mmの砂粒を 含む	良好	口:回転ナデ 外:回転ナデ、ヘラ記号 内:回転ナデ			12
第17図 12		SC07 東ベルト	土・壺	残存高:8.7	外・内:褐色	微粒~2mmの砂粒を 含む	良好	外:ヨコナデ、タテハケ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ			2
第17図 13		SC07 北東部	土・鉢	口:(19.0) 残存高:10.5	外・内:明赤褐色	微粒~2mmの砂粒を 含む	良好	口:ヨコナデ 外:ナデ? 内:ヘラケズリ	1/4		5



①大板井遺跡 25 全景 (南から)



②大板井遺跡 25 全景 (直上から、写真左が北)



① 6号住居 完掘状況（東から）



② 9号住居 全景（南から）



③ 9号住居 完掘状況（南から）



④ 10号住居 東西土層断面（北東から）



⑤ 10号住居 完掘状況（南東から）



⑥ 11号住居 南北土層断面（東から）



⑦ 11・12号住居 全景（東から）



⑧ 1号土坑 完掘状況（西から）



① 2号土坑 遺物出土状況 (1) (北から)



② 2号土坑 遺物出土状況 (2) (北から)



③ 2号土坑 完掘状況 (東から)



④ 5号土坑 完掘状況 (南から)



⑤ 6号土坑 完掘状況 (東から)



⑥ 4号住居 南北土層断面 (東から)



⑦ 4号住居 完掘状況 (南東から)



⑧ 8号住居 東西土層断面 (南西から)



① 8号住居 全景 (南東から)



② 8号住居 完掘状況 (南東から)



③ 3号土坑 完掘状況 (東から)



④ 1号住居 全景 (南から)



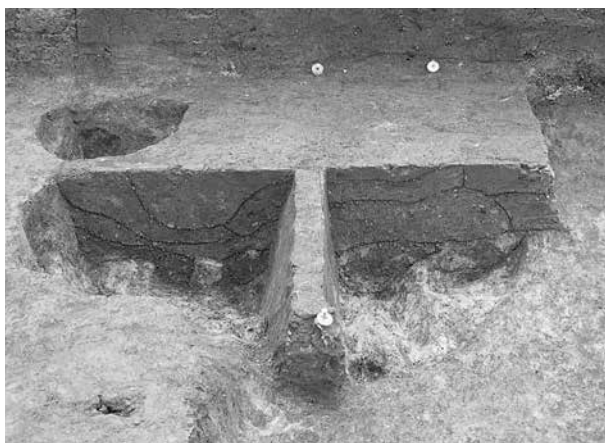
⑤ 1号住居 完掘状況 (南から)



⑥ 5号住居 南北土層断面 (西から)



⑦ 5号住居 東西土層断面 (北から)



⑧ 5号住居 カマド南北土層断面 (西から)



① 5号住居 カマド東西土層断面 (南から)



② 5号住居 全景 (南から)



③ 5号住居 完掘状況 (南から)



④ 7号住居 東西土層断面 (北から)



⑤ 7号住居 南北土層断面 (東から)



⑥ 7号住居 全景 (東から)



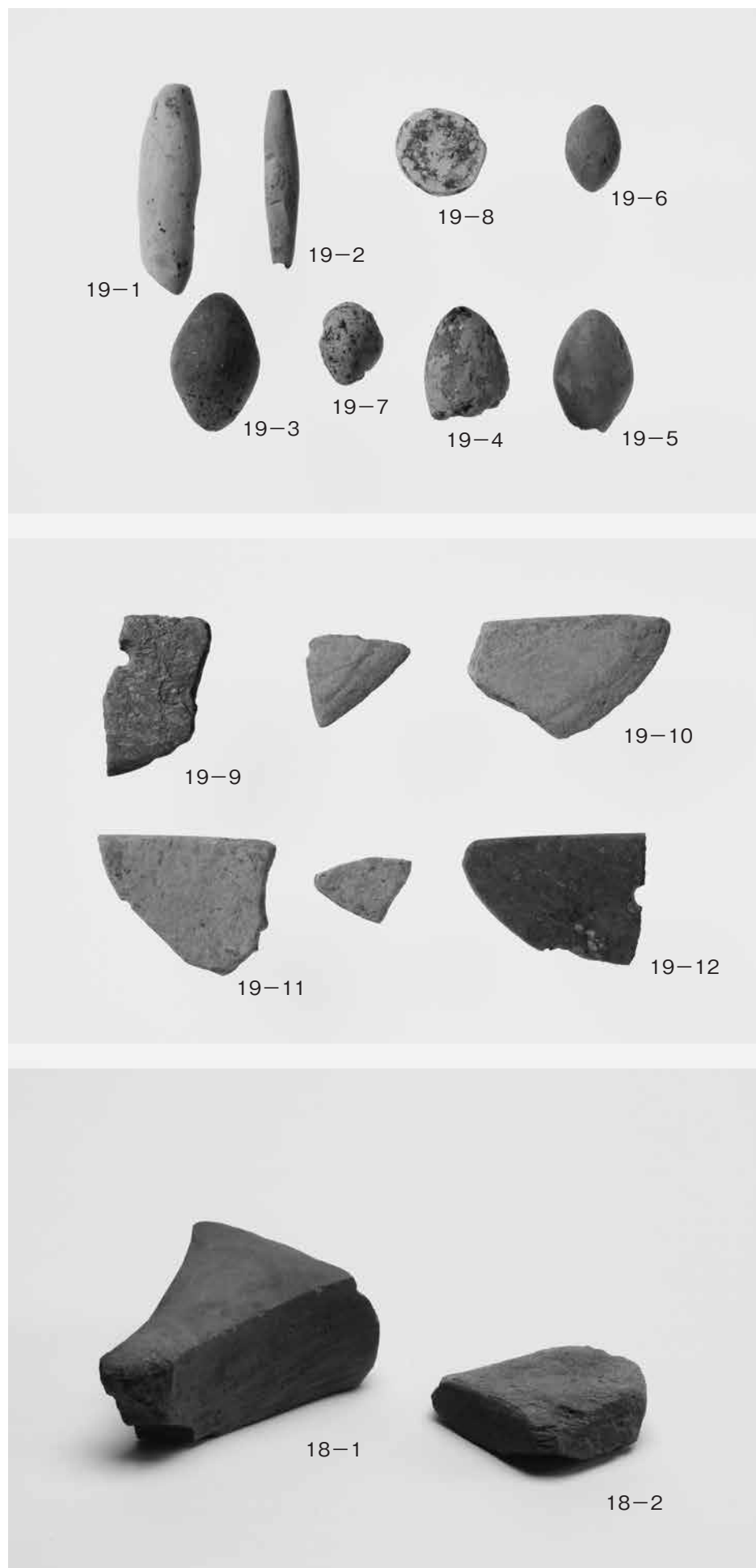
⑦ 7号住居 完掘状況 (東から)



⑧ 調査風景



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	おおいたいいせき							
書名	大板井遺跡 25							
副書名	福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 279 集							
編著者名	上田 恵							
編集機関	小郡市教育委員会							
所在地	〒838 - 0198 福岡県小郡市小郡 255 - 1 Tel. 0942 - 72 - 2111							
発行年月日	2014 (平成 26) 年 3 月 31 日							
保管場所	〔写真・図面・遺物〕小郡市埋蔵文化財調査センター							
保管場所所在地	〒838 - 0106 福岡県小郡市三沢 5147 - 3 Tel. 0942 - 75 - 7555							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大板井遺跡 25	小郡市 大板井	40216		33° 23' 6"	130° 33' 3"	20120507 ～ 20120621	194 m ²	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
大板井遺跡 25	集落	弥生 古墳 古代	竪穴住居・土坑 竪穴住居 竪穴住居・溝		弥生土器・石器 土師器・須恵器・石器 土師器・須恵器			
特記事項	大板井遺跡群のうち初期に調査された、弥生・古墳時代集落と隣接する地域が調査区である。同時期の集落の一部と想定される遺構・遺物を確認しており、集落域の範囲と旧地形、当時の集落域の地形的制約に関する知見が得られた。							

大板井遺跡 25

—福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第 279 集

編集 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 225-1
発行 片山印刷(有)
福岡県小郡市祇園 1 丁目 8-15